

満足度・生活の質に関する調査報告書 2023

～我が国の Well-being の動向～

令和5年7月

内閣府 政策統括官（経済社会システム担当）

目 次

はじめに	----- 2
第 1 章 満足度・生活の質の動向	
第 1 節 満足度の全般的な動向	----- 3
第 2 節 家族の形、子育てのしやすさ	----- 13
第 3 節 将来不安度の動向	----- 24
第 4 節 仕事への意識と満足度	----- 37
第 2 章 満足度・生活の質等調査、指標群とその活用	
第 1 節 各国政府・地方の指標群とその活用状況	----- 46
第 2 節 内閣府「満足度・生活の質に関する調査」について	----- 54

はじめに

内閣府では我が国の経済社会の構造を人々の満足度（Well-being）の観点から多面的に把握する取組として、「満足度・生活の質に関する調査」を実施してきた。

過去の研究や同様の取組も参考に進めた研究の結果、生活の幅広い範囲について包括的に評価できる体系として、総合的な主観満足度の他、分野別の満足度とそれに関連する意識や指標を問う調査形式を構築している。

これまでの調査報告書においては、各年の調査結果について時制やデータの特徴的な動きをまとめるとともに、指標の整備拡充に向け、様々な分析を行ってきた。例えば、2019年の第2次調査報告書では、基本的な分析に根差した分野別の指標群（ダッシュボード）を構築し、2020年の第4次報告書において、暮らし方や働き方と満足度の関係を調査分析した上で、この指標群の改定を行った。また、第4次報告書では、総合的な生活満足度と分野別の満足度の関係についても分析している。各時期の特徴に着目した分析として、新型コロナウイルス感染症の拡大がもたらした行動変容について分析しており、2021年の調査報告書では回答者の過半数が前年調査からの継続サンプルである長所を活かし、感染症の前後¹で同一回答者の満足度やそれを取り巻く指標がどのように変化したのかを明らかにしている。2022年の調査報告書では長引く感染症下において定着したと考えられる社会活動の変化が満足度へ与えた影響について分析を行った。

今回の報告書では、第1章において、満足度の動向を包括的に確認するとともに、家族構成、将来不安、仕事への意識等に関する分析を行った。第2章では、こどもの Well-being に着目した国際機関や各国の取組についてまとめるとともに、地方公共団体における住民の満足度の把握等の取組を紹介する。

¹ 各年の調査期間やサンプルの継続状況については図表2-2-2参照。

第1章 満足度・生活の質の動向

内閣府では、これまで4回にわたって、主観的 Well-being の代表的な指標として現在の生活にどの程度満足しているかを0～10点で自己評価する総合的な生活満足度を中心に、客観的指標と紐づける分野別満足度やこれに関する意識など幅広い情報を集める調査²を実施してきた。まずは、この経年の満足度の動向を確認する。

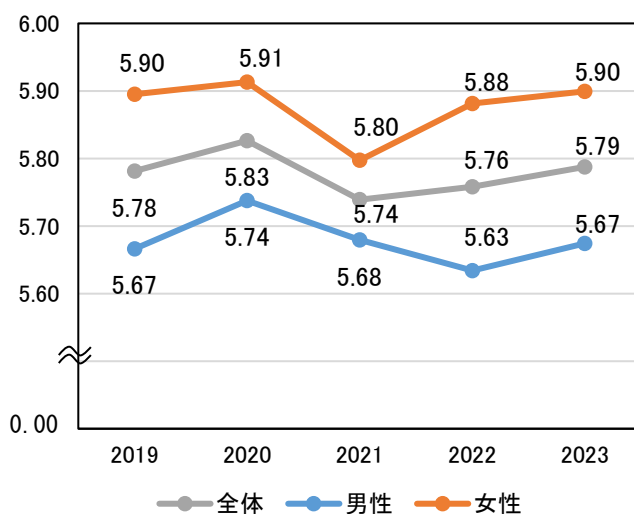
第1節 満足度の全般的な動向

1. 総合的な生活満足度の推移

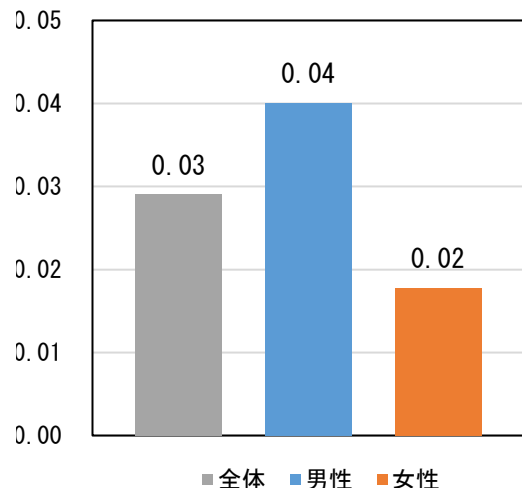
総合的な生活満足度（以下「生活満足度」）は、全体の平均が5.79と前回調査（2022年2月）から概ね横ばいの動きとなった（0.03ポイント上昇）。男女別にみると、男性は昨年より0.04ポイント上昇、女性は0.02ポイント上昇した³。なお、過去4回の調査と同様、男性よりも女性の方が高い水準にある。

図表1－1－1 生活満足度の推移と前回調査からの変化（男女別）

（1）推移



（2）前回調査からの変化



（若年層の生活満足度が上昇）

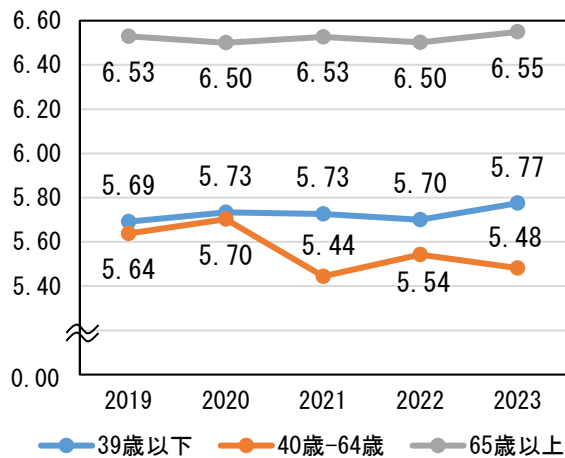
年齢階層別に若年層（15-39歳）、ミドル層（40-64歳）、高齢層（65-89歳）について生活満足度をみると、その水準は、高齢層で高く、ミドル層で低いという傾向がある。ミドル層では前回調査で0.1ポイント回復したものの、今回調査では0.06ポイント低下し、前はほぼ横ばいであった若年層が今回は統計上でも有意に0.07ポイント上昇した。高齢層の生活満足度は昨年より0.05ポイント上昇した。

² 調査の詳細は、第2章第2節を参照。

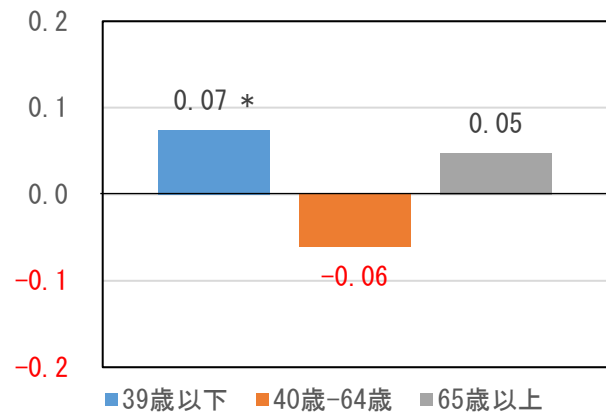
³ 2022年と2023年のサンプルを比較し、その平均の差の検定を行った。男性・女性共に変化は統計上有意味な差とは認められなかった。

図表 1-1-2 生活満足度の推移と前回調査からの変化（年齢階層別）

(1) 推移



(2) 前回調査からの変化



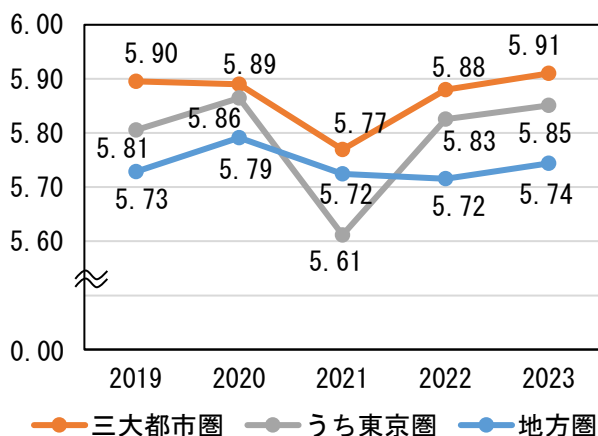
(備考) *は10%水準で有意

(三つの地域類型全てで生活満足度が回復)

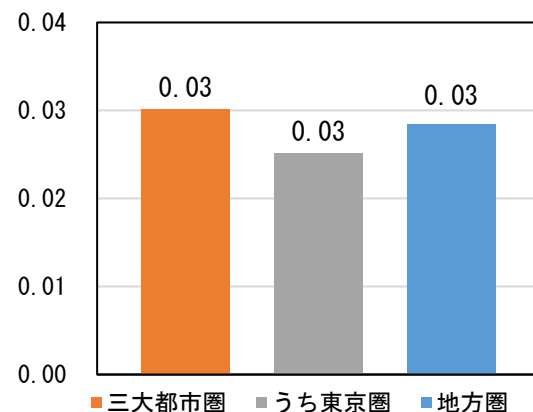
地域別の満足度の動向をみると、今回調査では東京圏⁴・三大都市圏⁵・地方圏⁶の全てにおいて上昇が確認され、コロナ感染症の拡大前である2019年2月調査時点と同程度の水準となった。なお、前回調査同様に三大都市圏が地方圏に比べると高くなっている。

図表 1-1-3 生活満足度の推移と前回調査からの変化（地域別）

(1) 推移



(2) 前回調査からの変化



⁴ 1都3県（埼玉県・千葉県・神奈川県）を指す。

⁵ 東京圏に加えて、名古屋圏（愛知県・三重県・岐阜県）、大阪圏（大阪府・京都府・兵庫県・奈良県）を指す。

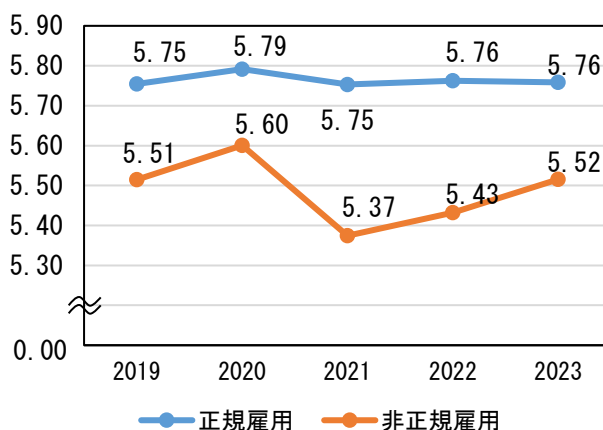
⁶ 三大都市圏を除く道県を指す。

（非正規雇用の生活満足度が回復）

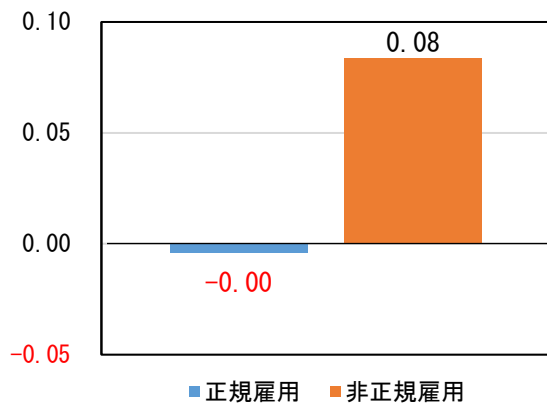
就業者の満足度の動向を正規雇用・非正規雇用に分けて分析した。正規雇用はコロナ禍における2020-2021年の間に0.04ポイント低下し、2021-2023年の間に0.01ポイント回復するなど大きく変動はしていない。他方、非正規雇用は2020-2021年の間に0.23ポイント低下したものの、2021-2023年の間に0.15ポイント回復し、2019年2月調査時点と同程度の水準となった。非正規雇用が正規雇用と比して、コロナ禍の影響を大きく受けたことが伺える。前年と比較してみると、正規雇用は横ばいに変化し、非正規雇用は0.08ポイント上昇した⁷。

図表1-1-4 生活満足度の推移と前回調査からの変化（雇用形態別）

（1）推移



（2）前回調査からの変化



2. 生活満足度の分布

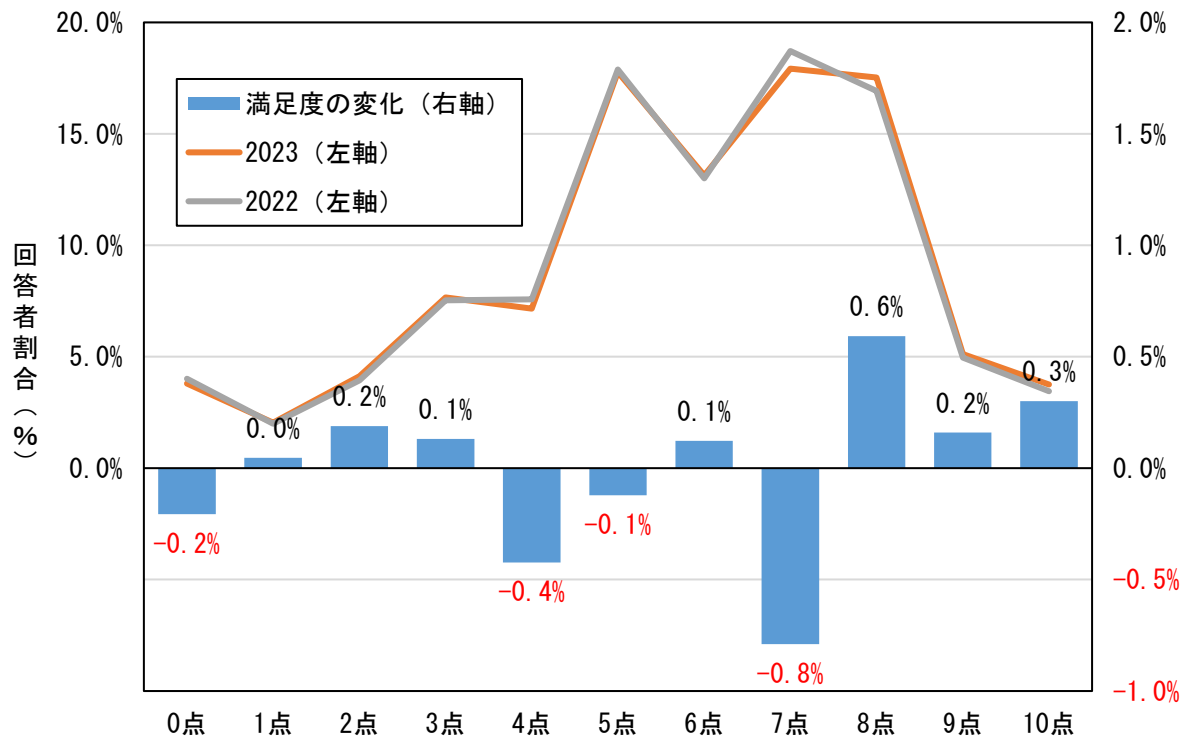
（満足度は5、7、8点に集中）

生活満足度の点数別の分布をみると、最頻値は7点(17.9%)、ついで5点(17.8%)、8点(17.5%)となり、全体の66%が5～8点に集中している。過去4回の調査の分布と比べて、分布の形状は大きく変わらない⁸。

⁷ 2022年と2023年のサンプルを比較し、その平均の差の検定を行った。正規雇用・非正規雇用共に変化は統計上有意な差とは認められなかった。

⁸ 分野別満足度についても、同様に点数別の分布を確認すると、「生活の楽しさ・面白さ」及び「身の回りの安全」満足度は生活満足度と似たふた山型となったが、それ以外の分野についてはそうした傾向は見られなかった。

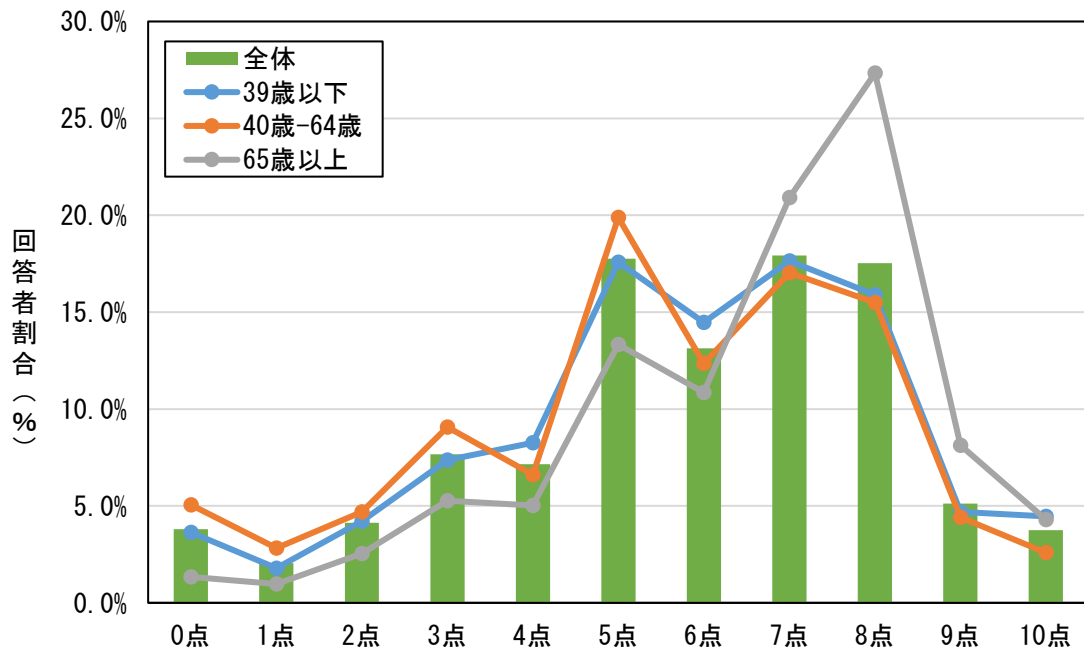
図表 1－1－5 生活満足度の点数別の分布（回答者割合）と 1 年間の変化



（若年層・ミドル層は 5 点、高齢層は 8 点に集中）

生活満足度の点数別の分布を年齢階層別に分けてみると、高齢層の最頻値は 8 点（27.3%）、ついで 7 点（20.9%）となり、ミドル層の最頻値は 5 点（19.9%）、ついで 7 点（17.0%）、若年層の最頻値は 7 点（17.64%）、ついで僅差で 5 点（17.58%）となる。このことから全体の最頻値である 7 点は全ての年齢層で多く回答されており、5 点は若年層とミドル層、8 点は高齢層による回答状況が全体の生活満足度の分布に影響していることがわかる。

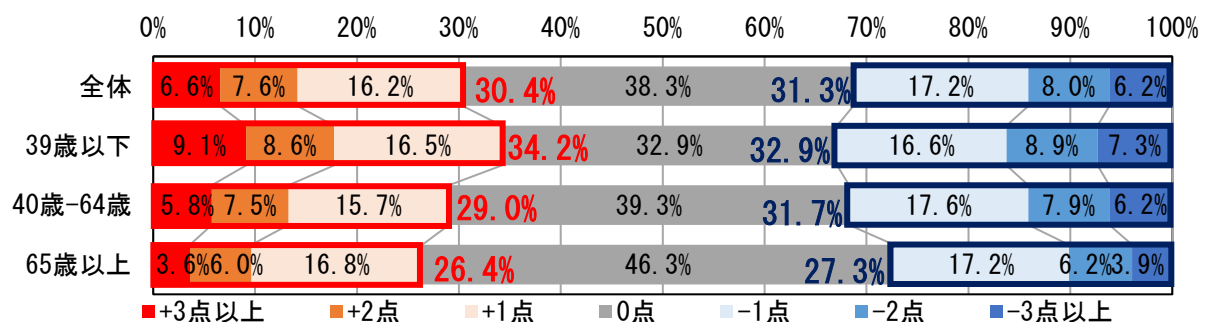
図表 1－1－6 生活満足度の点数別の分布（年齢階層別）



（継続回答者の生活満足度変化）

本年調査のサンプルの一部（約 6200 人）は、前回調査に引き続いての回答者であることから、このサンプルに限って個人の生活満足度の変化をみることができる。これによると、およそ 3 割程度の人満足度がそれぞれ上昇または低下しており、低下した割合が上昇した割合を 0.9% 上回った。さらに年齢階層別にみると、15-39 歳の若年層では満足度が上昇した割合が、低下した割合を上回り、ミドル層や高齢層では、満足度が低下した割合の方が上昇した割合を上回った。

図表 1－1－7 生活満足度の増減割合【継続サンプル】



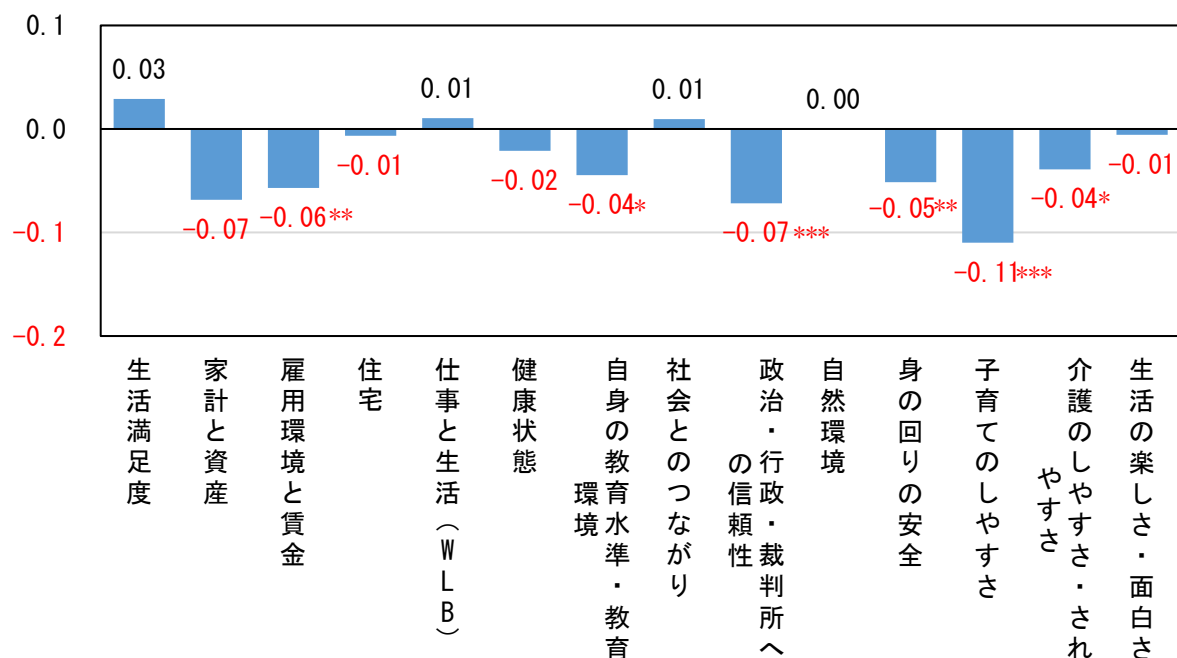
3. 分野別満足度の変化の特徴

本調査では、生活全体について問う生活満足度を客観的指標と結びつけるよう、13の分野について満足度を尋ねている⁹ことから、その動向を確認する。

（分野別満足度の変化）

前回調査と比べて、各分野別満足度は殆ど変わらない又は、低下した結果となった。統計的に有意な変化として確認されるのは、「雇用環境と賃金」「自身の教育水準・教育環境」「政治・行政・裁判所への信頼性」、「身の回りの安全」、「子育てのしやすさ」、「介護のしやすさ・されやすさ」といった項目であり、生活満足度に対して、これらの変化が大きなインパクトをもたらさなかったと考えられる¹⁰。

図表1－1－8 分野別満足度の変化



(備考)***、**、*はそれぞれ 1%、5%、10%で有意

（男女別の分野別満足度）

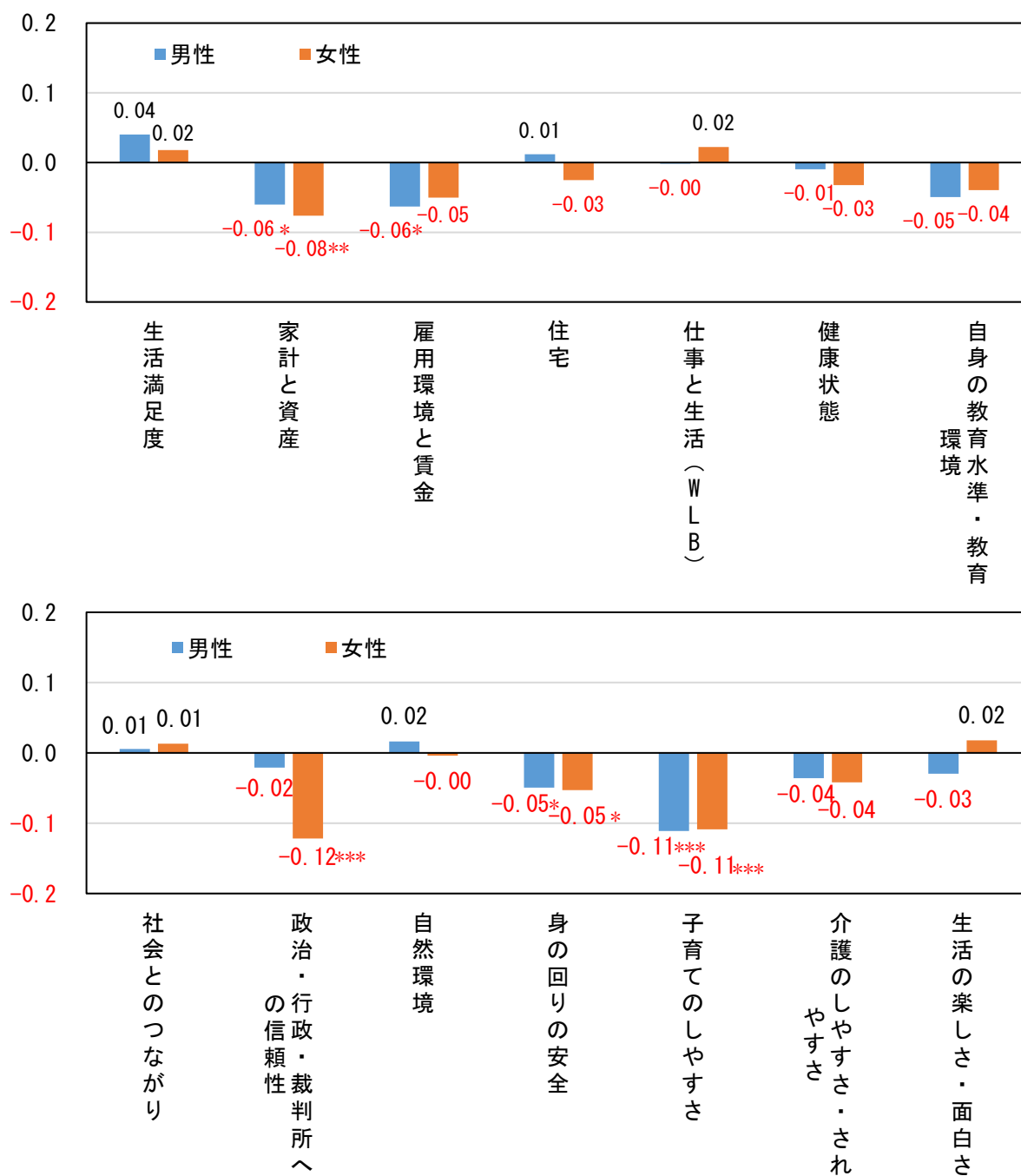
男女別にみると、男性では、「家計と資産」や「雇用環境と賃金」、「身の回りの安全」、「子育てのしやすさ」について統計的に有意な変化として低下がみられる。女性については、「家計と資産」や「政治・行政・裁判所への信頼性」、「身の回りの安全」、「子育てのしやすさ」について統計的に有意な変化として低下がみられる。「政

⁹ 各分野別満足度については第2章第2節を参照。

¹⁰ 内閣府(2019)『『満足度・生活の質に関する調査』に関する第2次報告書』における分析で、生活満足度との相関は「生活の楽しさ・面白さ」がもっとも大きいものであることが確認されているが、今回の調査でも、生活満足度と各分野別満足度との相関関係について、大きな変化はない。

「治・行政・裁判所への信頼性」は0.1ポイントの男女差があり、女性の方が大きく低下している。

図表 1－1－9 分野別満足度の変化（男女別）



（備考）***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%で有意

（分野別満足度と生活満足度の関係）

各分野別満足度と生活満足度との関係は、分野によって異なる。図表 1－1－10 は、生活満足度を 13 の分野別満足度で重回帰分析したものであるが、最も説明力が高いのは、「生活の楽しさ・面白さ」であり、次いで、「家計と資産」「仕事と生活」「健康状態」となる。これらの関係性は、一部において男女で差があり、「教育水準・教育環境」、「交友関係やコミュニティなど社会とのつながり」については、男性で有意に正の係数が認められるが、女性では有意ではない。また、「政治・行政・裁判所への信頼性」については、女性で有意に正の係数が認められるが、男性では有意ではない。

図表 1－1－10 各分野別満足度の説明力

被説明変数：生活満足度

	全体	男性	女性
家計と資産	0.220 ***	0.204 ***	0.237 ***
雇用環境と賃金	0.042 ***	0.049 ***	0.040 **
住宅	0.092 ***	0.093 ***	0.091 ***
仕事と生活（ワークライフバランス）	0.116 ***	0.135 ***	0.095 ***
健康状態	0.101 ***	0.087 ***	0.112 ***
教育水準・教育環境	0.060 ***	0.095 ***	0.026
交友関係やコミュニティなど社会とのつながり	0.039 ***	0.061 ***	0.011
政治・行政・裁判所への信頼性	-0.018 *	-0.005	-0.031 **
生活を取り巻く空気や水などの自然環境	0.014	0.027	0.001
身の周りの安全	0.005	-0.010	0.025
子育てのしやすさ	-0.017	-0.010	-0.021
介護のしやすさ・されやすさ	-0.057 ***	-0.054 ***	-0.057 ***
生活の楽しさ・面白さ	0.397 ***	0.353 ***	0.429 ***
定数項	0.368 ***	0.136	0.624 ***
修正済み決定係数	0.639	0.642	0.639
サンプルサイズ	10633	5289	5344

（備考）***、**、*はそれぞれ 1%、5%、10%で有意

（年齢階層別男女別でみる変化）

生活満足度の説明力が比較的高い分野および図表 1－1－9 で男性・女性ともに変化の幅が大きい分野（統計上有意ではないものも含む）に注目して、男女別かつ年齢階層別に、その変化を確認する。注目する分野は、経済面の指標である「家計と資産」、「雇用環境と賃金」、生活面に係る「仕事と生活（WLB）」、「子育てのしやすさ」、「生活の楽しさ・面白さ」である。

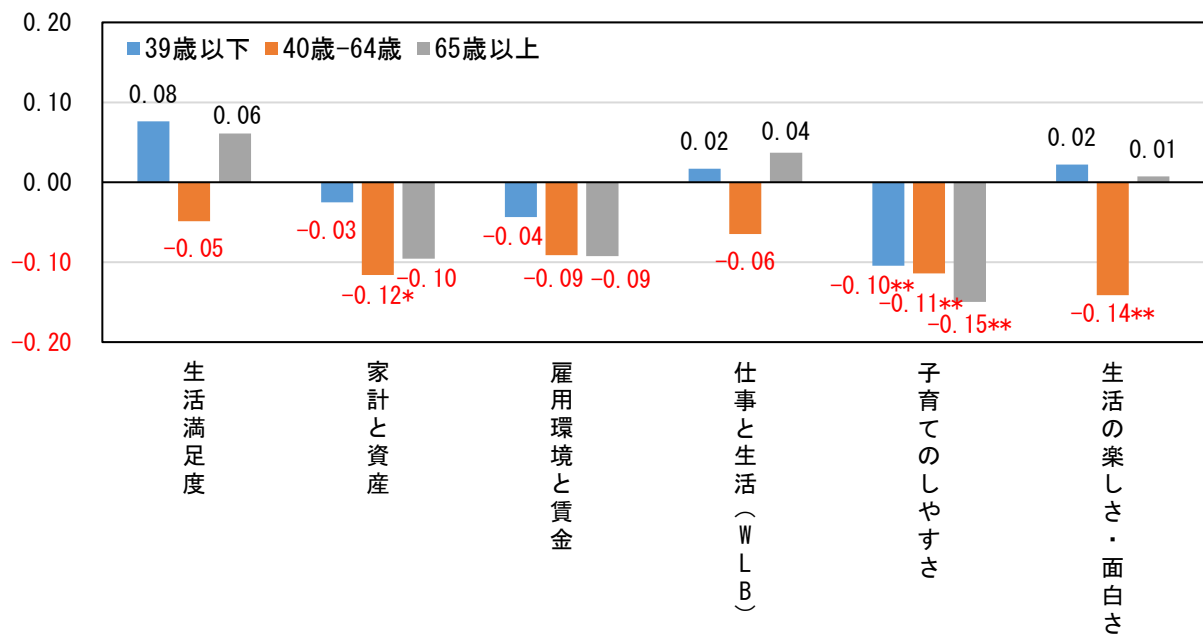
まず、生活満足度については、統計上有意でないものの、男性・女性ともに若年層・高齢層で上昇し、ミドル層で低下する傾向となった。

各分野については、男性ではミドル層で、どの分野でも前年と比べて低下し、特に「家計と資産」「生活の楽しさ・面白さ」が統計上有意に低下した。「子育てのしやすさ」ではすべての年齢層で統計上有意に低下した。

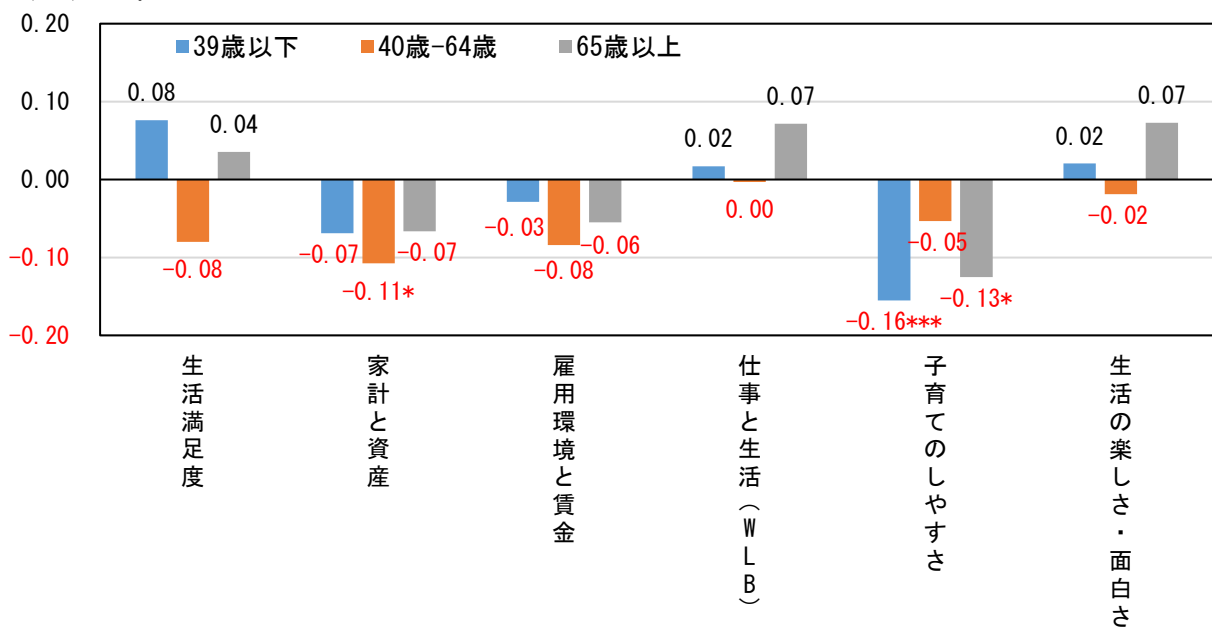
女性についても、ミドル層で、どの分野でも前年と比べてマイナスとなり、特に「家計と資産」が統計上有意に低下した。「子育てのしやすさ」では若年層および高齢層で統計上有意に低下した。

図表 1－1－11 分野別満足度の変化（年齢階層別・男女別）

（１）男性



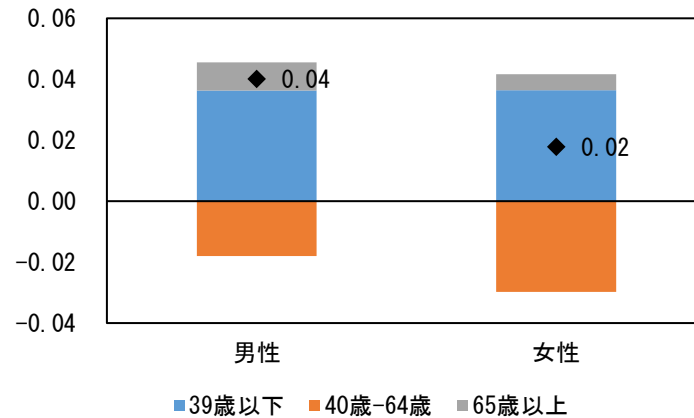
（２）女性



（備考）***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%で有意

男女・年齢階層別でみた生活満足度の変化が全体の変化にどの程度寄与したのかをみると、男性・女性共にミドル層が全体の生活満足度低下に大きく寄与し、若年層・高齢層の生活満足度の上昇が全体の生活満足度の上昇に寄与したことがわかる。

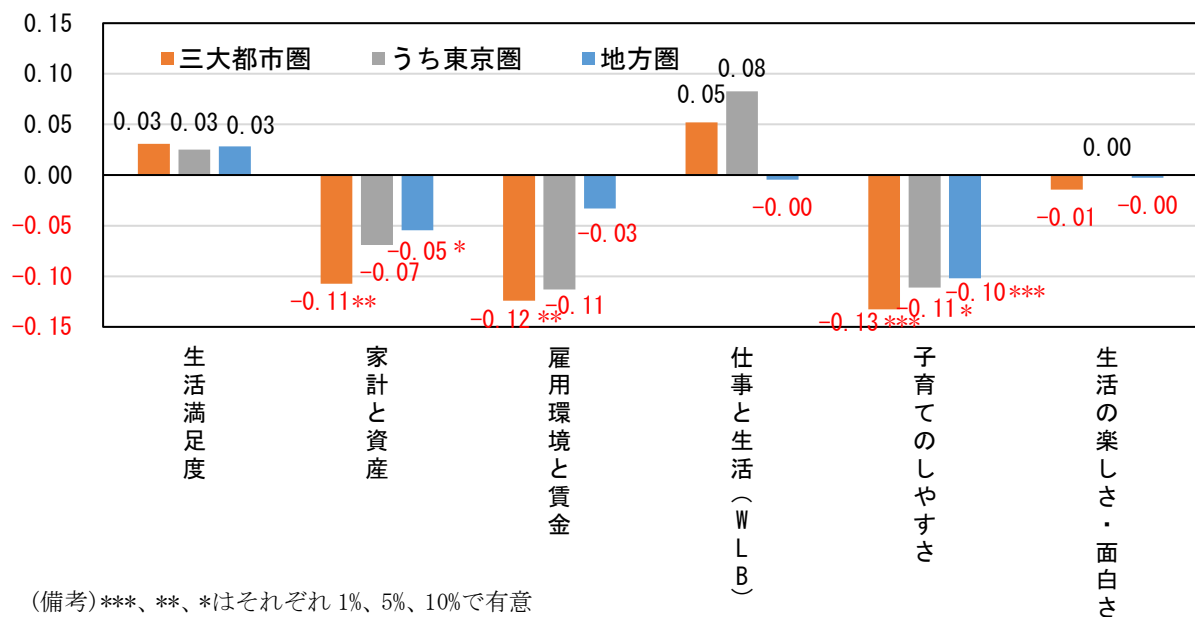
図表 1－1－12 年齢階層別の生活満足度変化の寄与



(地域別でみる変化)

地域別に確認すると、生活満足度および生活満足度へ説明力が高い「生活の楽しさ・面白さ」満足度は、都市圏および地方圏ともにほぼ変化は無かった。経済面の指標である「家計と資産」「雇用環境と賃金」満足度は特に三大都市圏で低下した。他方、生活面に係る「仕事と生活（WLB）」満足度は地方圏ではほぼ変化がなく、三大都市圏でやや上昇した。「子育てのしやすさ」満足度は、三大都市圏、地方圏とともに統計上有意な低下がみられた。

図表 1－1－13 分野別満足度の変化（地域別）

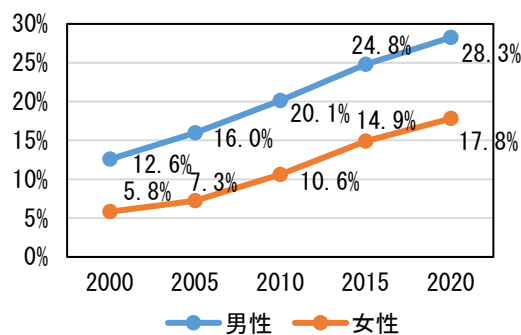


(備考)***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%で有意

第2節 家族の形、子育てのしやすさ

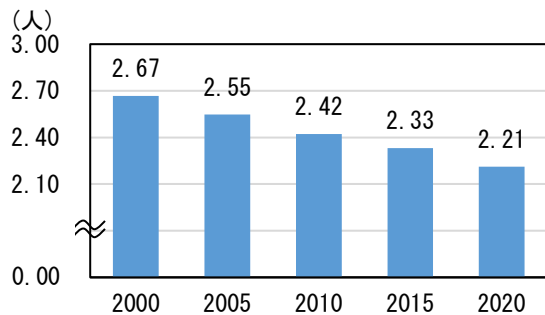
少子化の進行、未婚率の上昇が続き、世帯人数は減少傾向にある。このような社会情勢の下、こども家庭庁が令和5年4月に発足したことも踏まえ、本節では、世帯人数や世帯構成が満足度に与える影響に加えて、どのようなことが子育てのしやすさ満足度に影響するかを分析する。

図表1-2-1 50歳時の未婚割合の推移（男女別）



（備考）国立社会保障・人口問題研究所
「人口統計資料集」より作成

図表1-2-2 世帯人数の推移

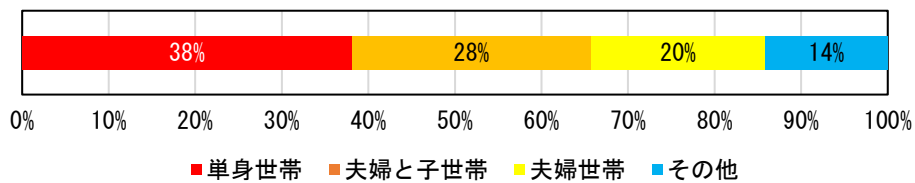


（備考）総務省「国勢調査」より作成

1. 世帯構成と満足度

世帯構成の割合は、単身世帯が4割弱、次いで夫婦と子世帯¹¹、夫婦世帯¹²と続き、これら3つの類型で全体の8割強を占める。以下の項では、この3つの世帯構成を中心に、満足度について分析する。

図表1-2-3 世帯構成の割合



（備考）総務省「日本の統計 2023」より作成

（世帯人数・世帯構成と生活満足度）

世帯人数と生活満足度の関係について男女別に確認すると、男性は女性と比べ、

¹¹ 夫婦及び子どもが含まれる世帯。その他世帯員が含まれる世帯を含む。

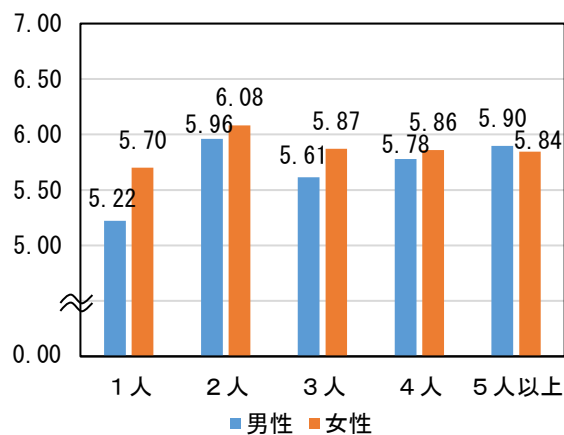
¹² 夫婦2人のみで構成される世帯。

世帯人数ごとの生活満足度の差が大きく、特に世帯人数が1人と2人の場合では、顕著な差がある。また、男女共に、世帯人数が1人の時に最も生活満足度が低く、世帯人数が2人の時に最も生活満足度が高い。

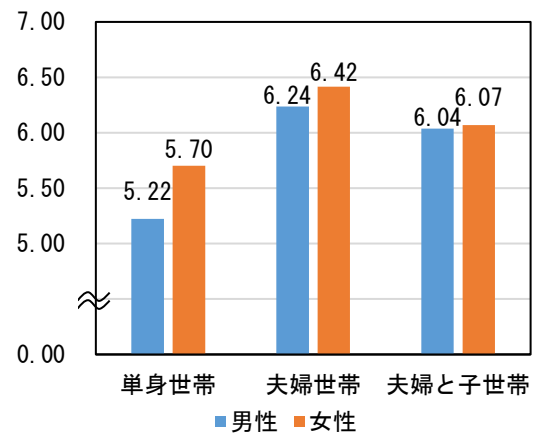
世帯構成と生活満足度の関係では、夫婦世帯が最も満足度が高く、単身世帯が最も低くなっている。

図表 1－2－4 世帯人数・世帯構成と生活満足度（男女別）

(1) 世帯人数別



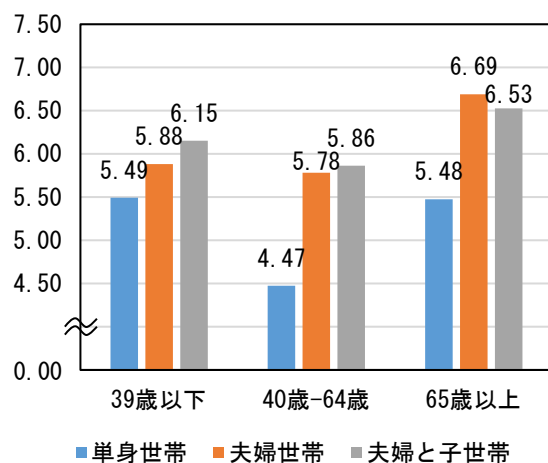
(2) 世帯構成別



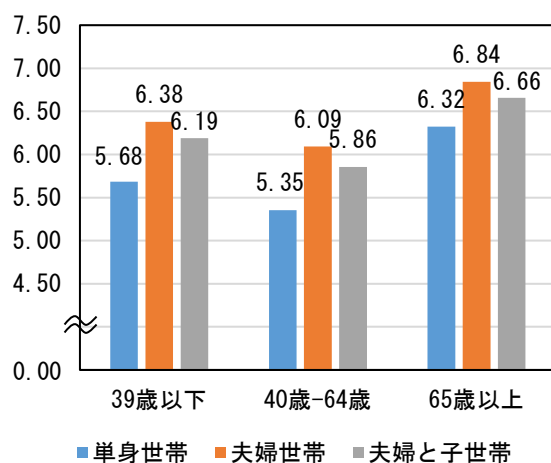
さらに、年齢階層別に世帯構成と生活満足度の関係を確認すると、男性の若年層及びミドル層では、夫婦と子世帯で最も満足度が高いが、男性のシニア層及び女性では、夫婦世帯が最も満足度が高い。また、男性の単身世帯では、ミドル層において、他の世帯構成と比較して、顕著に満足度が低い。

図表 1－2－5 世帯構成と生活満足度（年齢階層別）

(1) 男性



(2) 女性



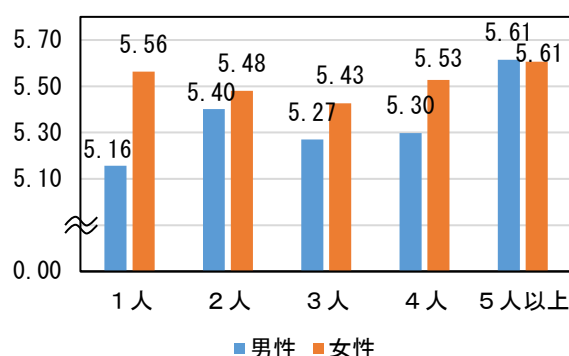
(世帯人数・世帯構成と「社会とのつながり」満足度)

次に、世帯人数と「社会とのつながり」満足度の関係を男女別に確認する。「社会とのつながり」満足度は、生活満足度と比較して、世帯人数による満足度の差が小さい。特に女性は世帯人数によって、違いはほとんど見られない。男性では世帯人数が5人以上の時に最も高い満足度となり、生活満足度と同様に世帯人数が1人の時に、最も満足度が低い。

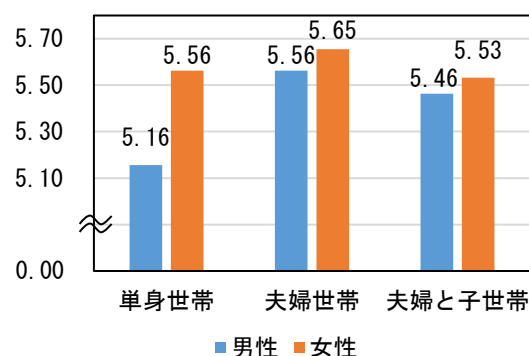
世帯構成と「社会とのつながり」満足度の関係を確認すると、男性は、単身世帯と比較して、夫婦世帯、夫婦と子世帯で、満足度が顕著に高い。一方、女性は世帯構成によって「社会とのつながり」満足度に大きな違いは見られない。

図表 1-2-6 世帯人数・世帯構成と「社会とのつながり」満足度（男女別）

(1) 世帯人数別



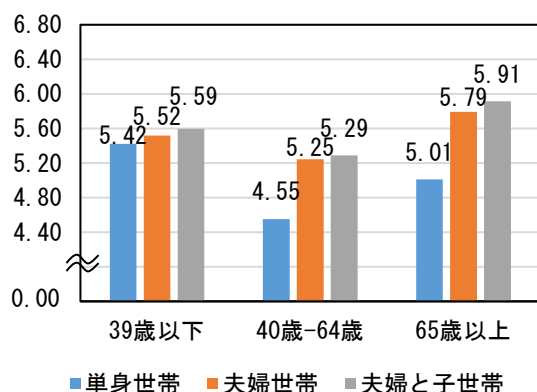
(2) 世帯構成別



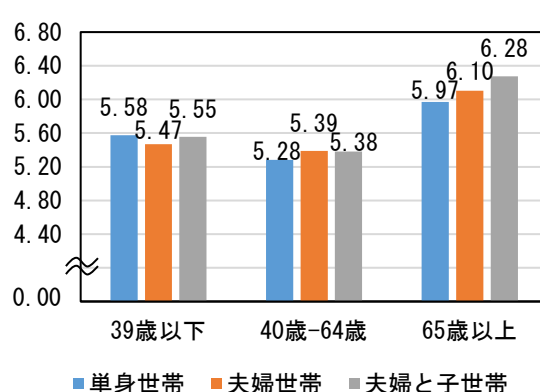
さらに、年齢階層別でみると、男性のミドル層及びシニア層の単身世帯は、夫婦世帯、夫婦と子世帯と比較して、顕著に満足度が低い。また、男性の夫婦世帯、夫婦と子世帯及び女性の全ての世帯構成において、シニア層が最も満足度が高く、男性の単身世帯では、若年層で最も満足度が高い。

図表 1-2-7 世帯構成と「社会とのつながり」満足度（年齢階層別）

(1) 男性



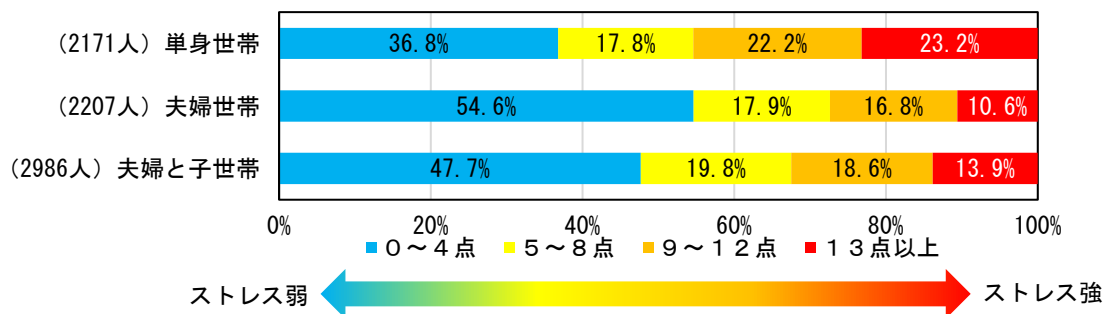
(2) 女性



（心の健康状態と満足度）

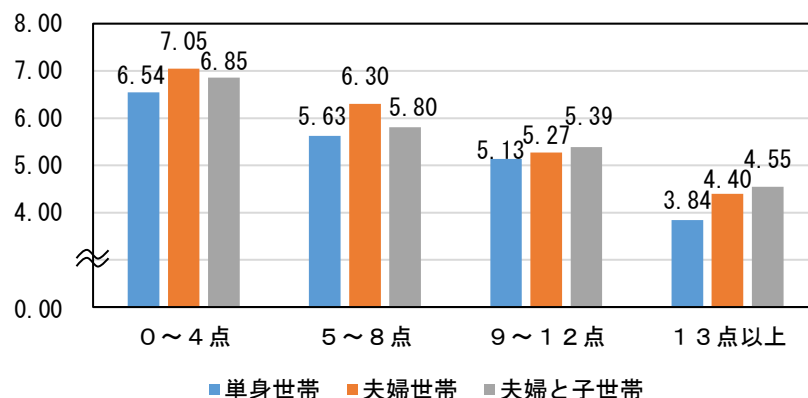
心の健康状態を測ることができる、いわゆるK 6¹³の分布を単身世帯、夫婦世帯、夫婦と子世帯で確認すると、K 6の合計点数が5点以上のストレスを感じている割合が、単身世帯において最も高く、夫婦世帯が最も低い。特に高いストレス状態と予測される13点以上の割合は、単身世帯が夫婦世帯の2倍以上と大きな割合となる。

図表 1－2－8 K 6による心の健康状態の分布



心の健康状態は、満足度に大きな影響をもたらすことがわかっている¹⁴。単身世帯、夫婦世帯、夫婦と子世帯でK 6の階級ごと（0～4点、5～8点、9～12点、13点以上）の生活満足度を確認すると、いずれの階級においても、単身世帯が最も生活満足度が低く、どのようなストレス状況下においても、家族がいることが生活満足度を高めることが示唆される。

図表 1－2－9 世帯構成と生活満足度（K 6水準別）



¹³ K 6とは、うつ病・不安障害などの精神疾患をスクリーニングすることを目的として開発された心の健康状態を測る指標のひとつ。「1. 神経過敏に感じましたか」、「2. 絶望的だと感じましたか」、「3. そわそわ、落ち着きがなくなりましたか」、「4. 気分が沈んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じましたか」、「5. 何をするのも骨折りだと感じましたか」、「6. 自分は価値がない人間だと感じましたか」の6項目について、「いつも」（4点）、「たいてい」（3点）、「ときどき」（2点）、「少しだけ」（1点）、「全くない」（0点）の5段階で回答したものを点数化し、合計点数が高いほど精神的健康状態が悪い可能性があるとされる。

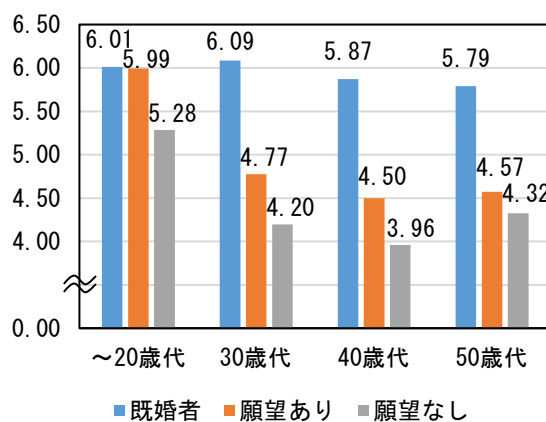
¹⁴ 内閣府（2022）「満足度・生活の質に関する調査報告書 2022」を参照。

（結婚願望の有無と満足度）

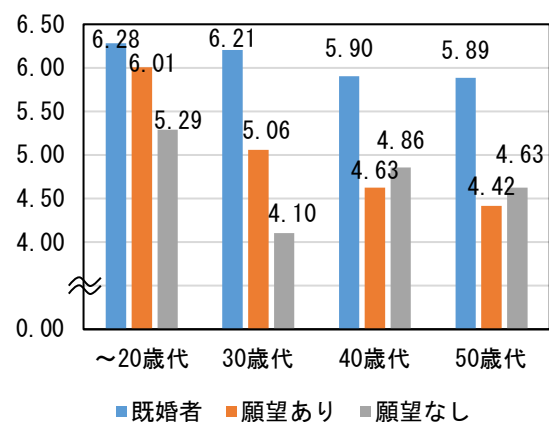
続いて、結婚願望の有無と生活満足度の関係を確認する。男女共に 20 歳代以下において、既婚者と結婚願望がある人¹⁵では、生活満足度の差はわずかであり、両者は結婚願望がない人よりも生活満足度が高い。一方、30 歳代以上では、既婚者は未婚者と比較して生活満足度が顕著に高い。また、男性はいずれの年代においても結婚願望ありの方が願望なしよりも満足度が高いが、女性の 40 歳代以降は、結婚願望なしの方が高い結果となっている。

図表 1－2－10 結婚願望の有無と生活満足度

（1）男性



（2）女性



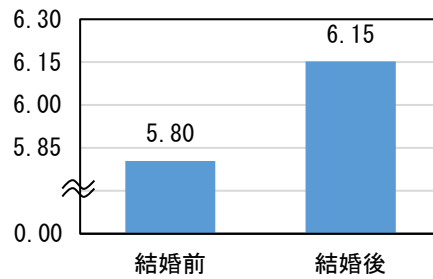
（結婚前後の変化）

未婚者と比較して、既婚者の方が生活満足度が高いことから、継続サンプルにおいて結婚をする前後の満足度の変化¹⁶を確認すると、結婚前よりも結婚後のほうが生活満足度が高くなっている。さらに、増減割合を確認すると、4 割以上の人満足度が上昇しており、低下した人の割合を上回った。

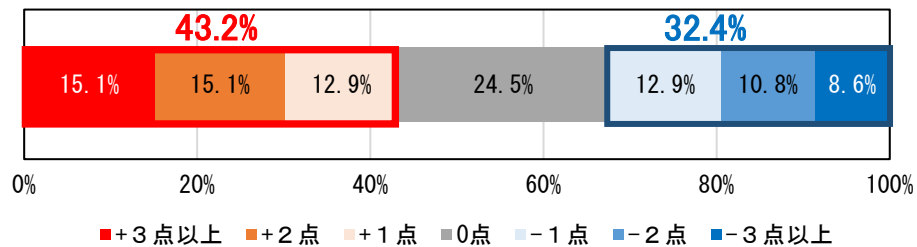
¹⁵ 結婚に対する考えに対し「ある程度の年齢までには結婚するつもり」または「いずれ結婚するつもりだが、理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」に回答した人。

¹⁶ 継続サンプルのうち、1 年間で経験したことで「結婚した」を選択した人の結婚前後の生活満足度を比較（第 4 回調査及び第 5 回調査で計 139 人）。

図表 1－2－11 結婚前後の生活満足度の変化【継続サンプル】



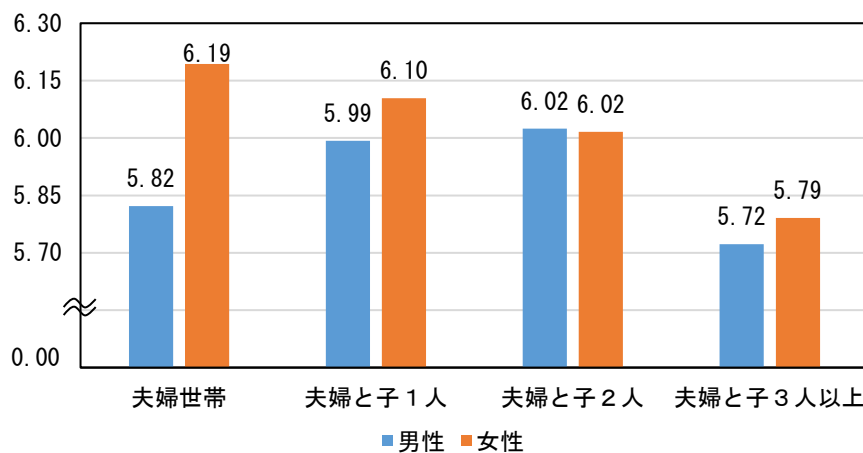
図表 1－2－12 結婚前後の生活満足度の増減割合【継続サンプル】



（こどもの人数と満足度）

こどもの人数と生活満足度の関係を確認すると、こどもの人数が増えるにつれて、生活満足度が低下していく姿となっている。また、こどもが1人の世帯では、男性よりも女性のほうが満足度が高いが、こどもが2人以上の世帯では、両者の差は小さくなる。

図表 1－2－13 こどもの人数と生活満足度（男女別）

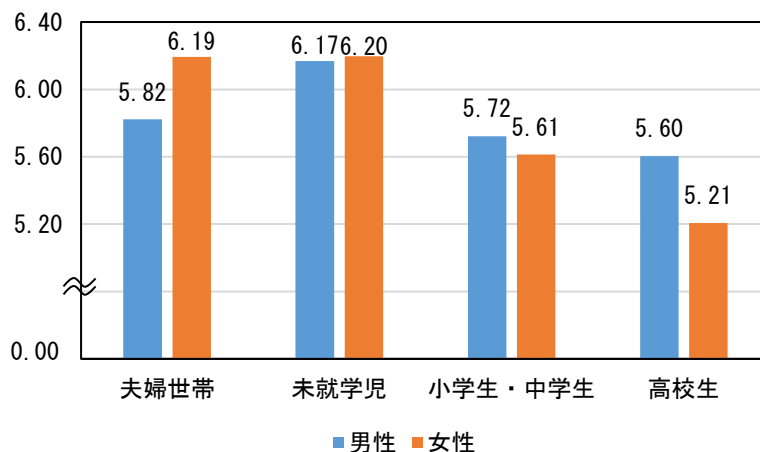


（備考）65歳以上を除いている。

（こどもの就学状況と満足度）

こどもの就学状況別¹⁷に生活満足度を確認すると、未就学児がいる世帯と比較して、小学生・中学生、高校生のこどもがいる世帯では男女共に相対的に低くなっている。男性では、小学生・中学生と高校生での、満足度の差は大きくないが、女性では、小学生・中学生と比べて高校生のこどもがいると、満足度が低くなっている。

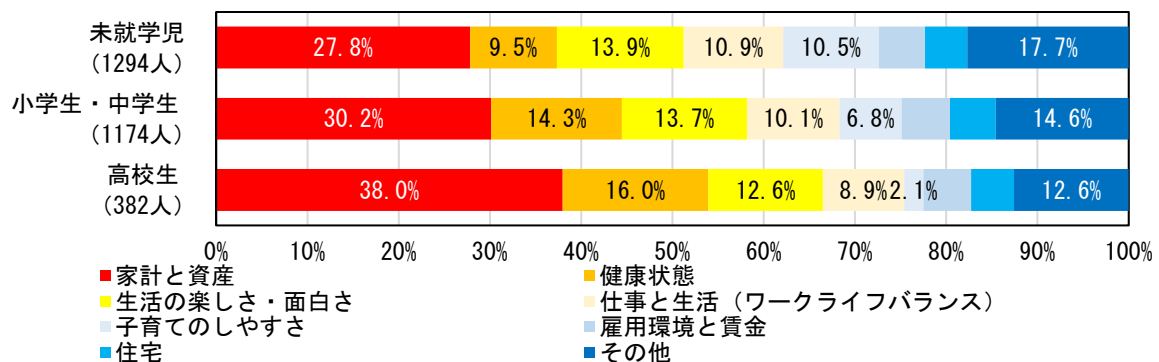
図表 1－2－14 こどもの就学状況と生活満足度（男女別）



（備考）65 歳以上を除いている。

世帯にいるこどもが未就学児の場合と比較し、小学生・中学生、高校生の場合には、生活満足度が低い水準にあるため、こどもの就学状況ごとに、生活満足度を判断する際に最も重視する項目を確認する。こどもがいる世帯では、「家計と資産」の割合が最も高く、またその割合は未就学児、小学生・中学生、高校生とこどもが成長するにつれて、上昇する傾向にある。

図表 1－2－15 こどもの就学状況ごとの生活満足度に影響を与える項目

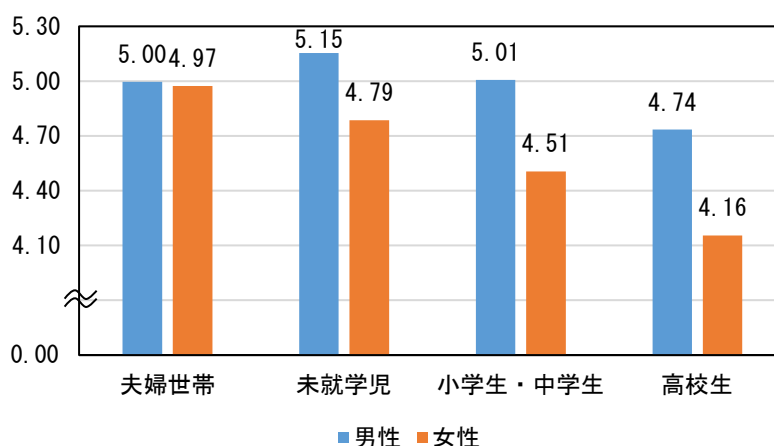


（備考）65 歳以上を除いている。

¹⁷ 未就学児、小学生・中学生、高校生が世帯にいるかどうかで分類。複数該当の場合はそれぞれに重複計上。

こうした状況を踏まえ、次にこどもの就学状況ごとに「家計と資産」満足度を確認すると、こどもが未就学児から小学生・中学生、高校生と成長するにつれて低くなる。また、男性と比較して、女性は、こどもが成長するにつれて、満足度が大きく低下する傾向にある。

図表 1－2－16 こどもの就学状況と「家計と資産」満足度（男女別）

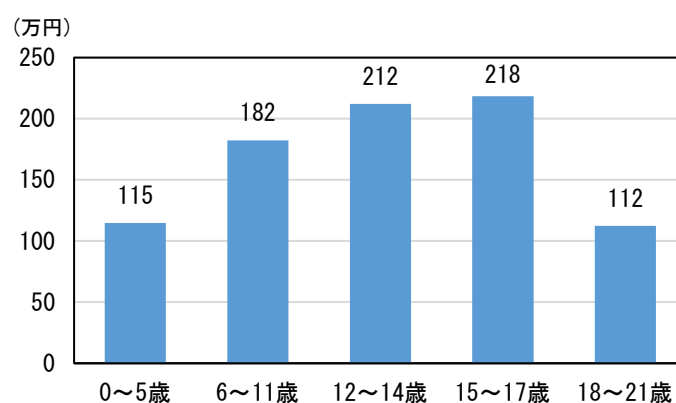


（備考）65 歳以上を除いている。

年代別のこども 1 人あたりの年間の子育て費用は、こどもの成長に合わせて増加しており、15～17 歳が最も高い。

これらのことから、こどもの成長に伴い増加する子育て費用が、家計と資産を圧迫することで、生活満足度の低下要因となっていることが推察される。

図表 1－2－17 こども 1 人あたりの年間の子育て費用



（備考）内閣府「社会全体の子育て費用に関する調査研究報告書」より作成

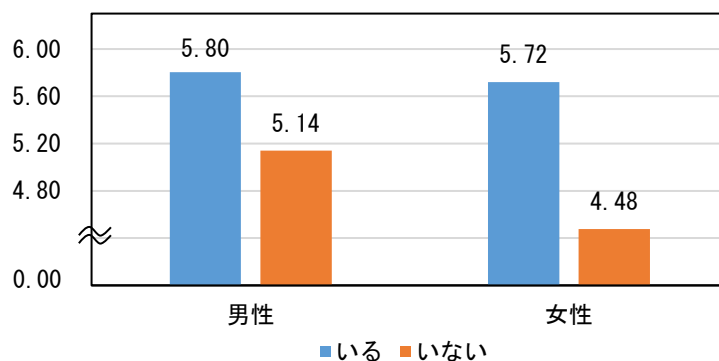
2. 「子育てのしやすさ」満足度に影響を与える要素

前項では、こどもがいる世帯といない世帯の満足度を比較した。以下の項では、こどもがいる世帯を対象を限定し、分野別満足度の中で、こどもがいることで影響を受けることが推察される「子育てのしやすさ」満足度を分析する¹⁸。

（子育てを気軽にお願いできる人の有無）

子育て世帯において、気軽に子育てをお願いできる人がいる¹⁹かどうか、「子育てのしやすさ」満足度に影響するのかを確認すると、男女共に子育てをお願いできる人がいると、いない場合よりも満足度が高い。また、特に女性は、お願いできる人がいない場合に、満足度が大きく低下する。

図表 1－2－18 子育てを気軽にお願いできる人の有無と
「子育てのしやすさ」満足度(男女別)



（友人等との交流頻度）

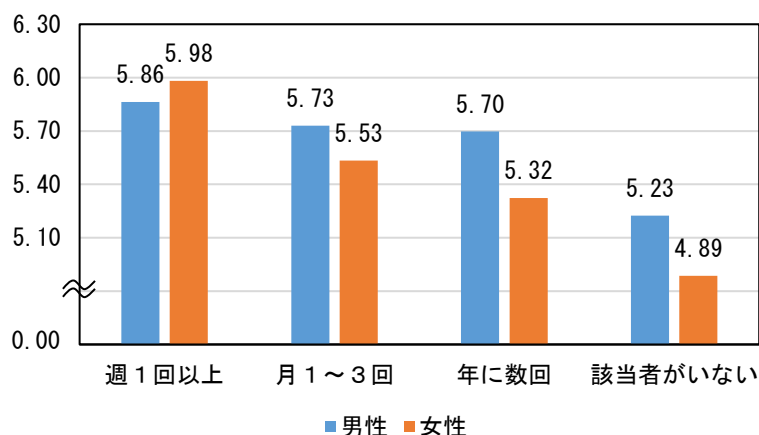
子育て世帯において、友人等との交流頻度が「子育てのしやすさ」満足度に影響があるかを確認すると、男性においては、交流する友人等がない場合に満足度が低く、交流がある場合には、交流の頻度によって満足度に大きな違いは見られない。

一方、女性においては、交流する友人等がない場合に「子育てのしやすさ」満足度が低く、友人等との交流がある場合には、男性とは異なり、頻度が多ければ多いほど満足度が高まっている。

¹⁸ 本項における「子育てのしやすさ」満足度は、18歳未満のこどもがいる子育て世帯に限定した数値。

¹⁹ 「子育てを気軽にお願いできる人がいるか」の問に対し、家族、親族、友人、近所の人、子育てボランティア、ベビーシッターのいずれか1つ以上を選択した人。

図 1－2－19 友人等との交流頻度と「子育てのしやすさ」満足度(男女別)



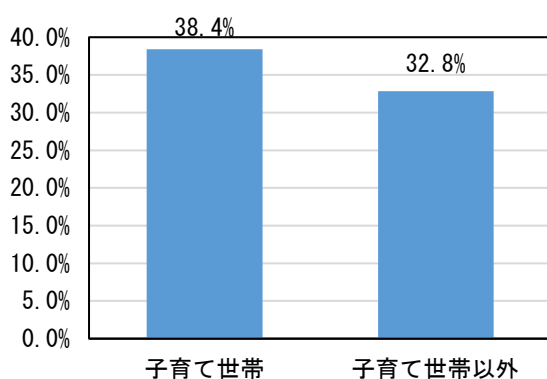
(テレワークと子育てのしやすさ)

テレワークすることができるかできないか²⁰の割合を、性別及び子育て世帯別で確認すると、男性は女性よりもテレワークをできる割合が高い。また、男性では、子育て世帯のほうが、子育て世帯以外よりもテレワークができる割合がわずかに高いが、女性では、子育て世帯か否かによってテレワークをすることができる割合はほとんど変わらない。

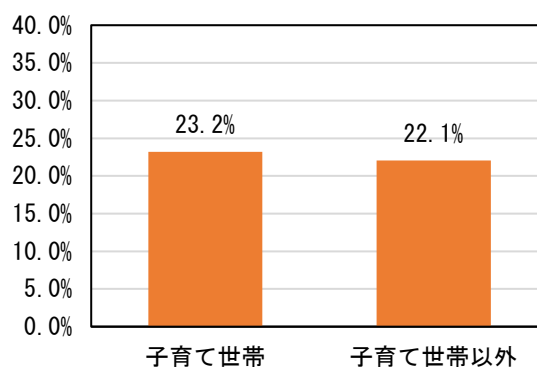
子育て世帯において、テレワークできるか否かによって、「子育てのしやすさ」満足度に影響があるかを確認すると、男女共に、テレワークを実施できる場合に、実施できない場合よりも満足度が高い傾向が見られたが、子育てを気軽にお願いできる人の有無ほどの顕著な差はない。

図 1－2－20 テレワークの可否割合

(1) 男性

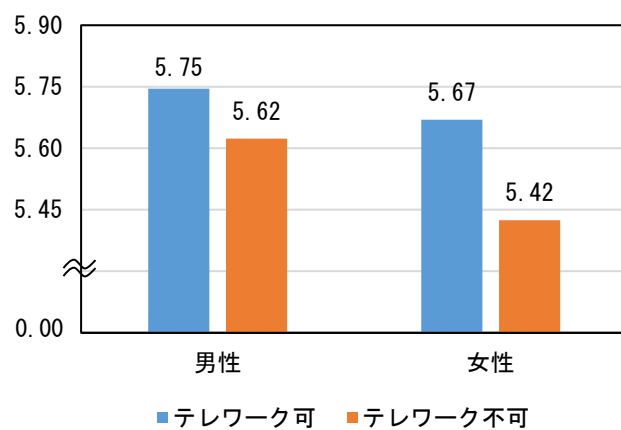


(2) 女性



²⁰ 「現在の働き方」との問に対し、「テレワーク (ほぼ 100%)」「テレワーク中心 (50%以上) で、定期的に出勤を併用」「出勤中心 (50%以上) で、定期的なテレワークを利用」「基本的に出勤だが、不定期にテレワークを利用」のいずれかを選択した場合をテレワーク可、選択していない場合をテレワーク不可とした。

図 1-2-21 テレワークの可否と「子育てのしやすさ」満足度（男女別）



第3節 将来不安度の動向

過去の報告書では、主に満足度に関する分析を行ってきたが、「満足度・生活の質に関する調査」では、分野別の将来不安についても、0～10点で回答を求めている。満足度は、「現在」の状況への感じ方・考え方が反映されていると解釈することができるが、本節では、「未来」の状況への感じ方・考え方をみるため、分野別の将来不安度に着目し、分析を行う。なお、調査票では、0点を「非常に不安である」、10点を「全く不安でない」とし、回答を求めたが、本報告書では「10から回答した点数を引いた数」を用い、「将来不安度が高い＝将来への不安を大いに感じている」ことを示した。すなわち、本節において、将来不安度は点数が高いほど将来への不安が大きく、低いほど将来への不安が小さいことを示している。

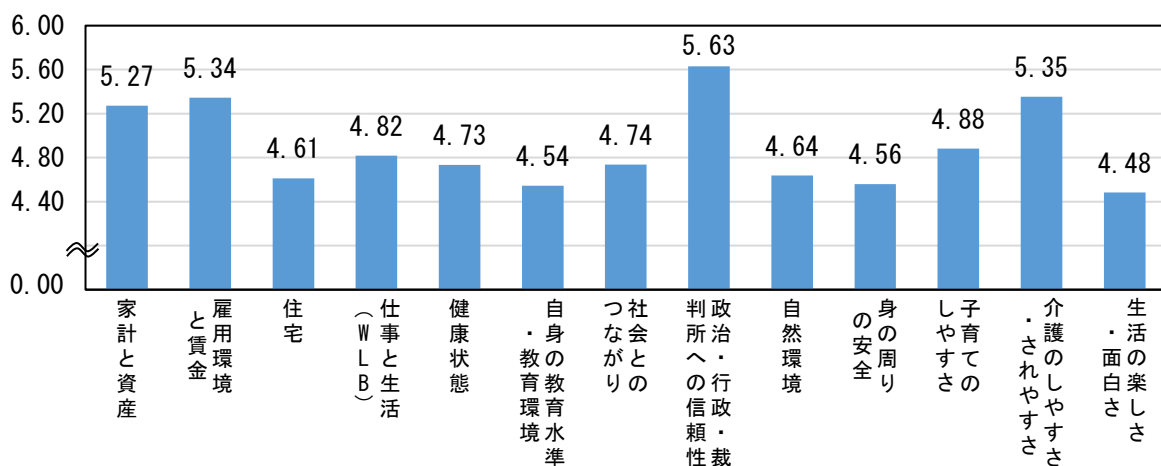
1. 分野別将来不安度

（満足度と将来不安度の相関関係）

図表1－3－1を見ると、最も将来不安度が高い項目は「政治・行政・裁判所への信頼性」であり、最も低い項目は「生活の楽しさ・面白さ」である。

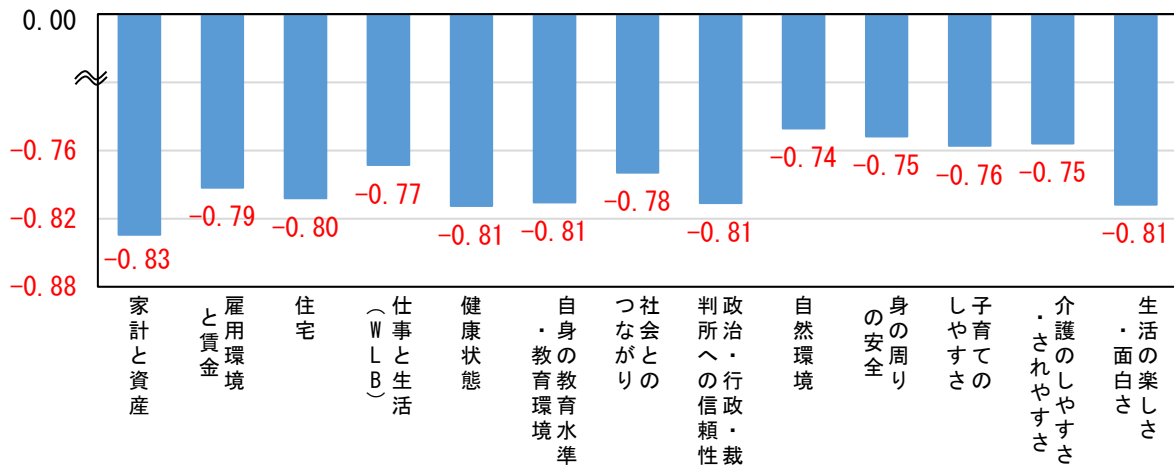
続いて、図表1－3－2により、分野別の満足度と将来不安度の相関係数を確認する。グラフでは、全ての分野で相関係数が絶対値で0.7を超えており、各分野の満足度と将来不安度の間には、強い相関関係があることが分かる²¹。このうち、相関関係が最も強い項目は「家計と資産」、相関関係が最も弱い項目は「自然環境」である。

図表1－3－1 分野別将来不安度



²¹ 全ての分野において、現在の満足度が高いほど将来不安度が低く、現在の満足度が低いほど将来不安度が高い傾向にあることを表している。

図表 1－3－2 分野別満足度と将来不安度との相関係数



(分野別将来不安度の推移)

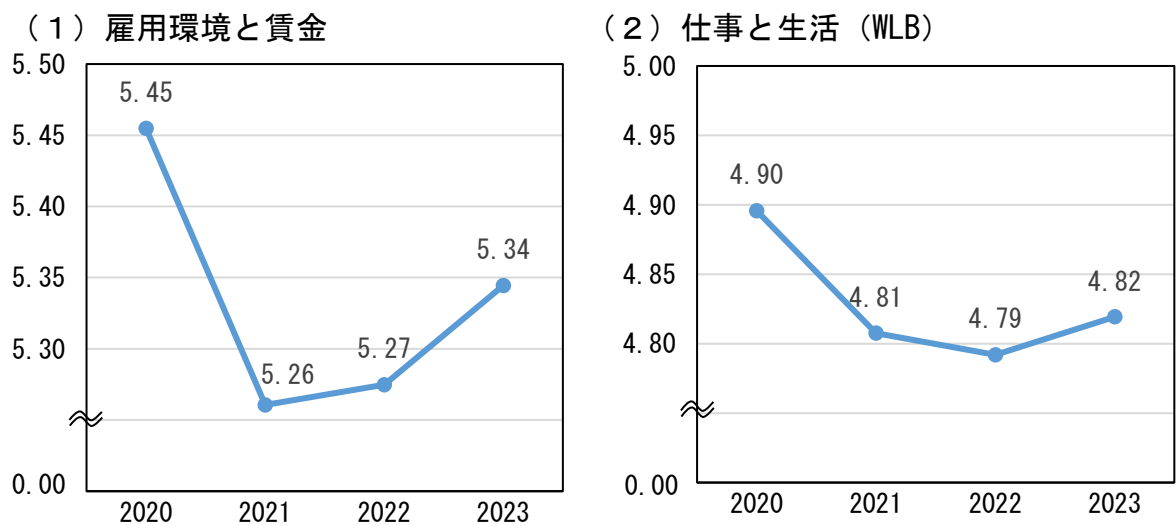
後述では、分野別将来不安度のうち、「雇用環境と賃金」「仕事と生活 (WLB)」「健康状態」「社会とのつながり」に注目し、分析を行う。

このため、まずは、これらの分野別将来不安度の推移に着目する。

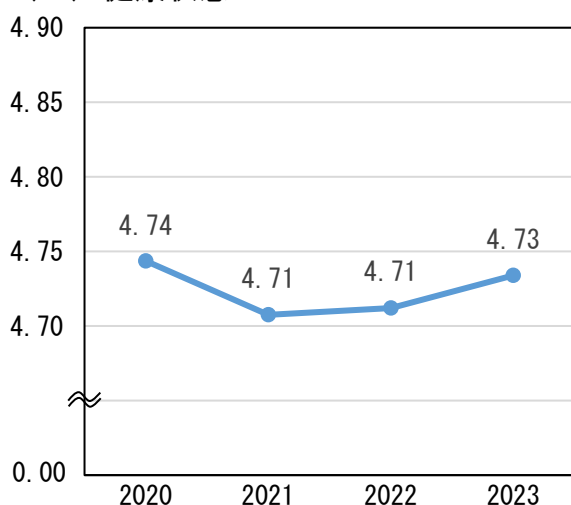
「雇用環境と賃金」では、コロナ禍直前の 2020 年 2 月における将来不安度が最も高いが、2021 年 3 月には将来不安度が大幅に減少しており、足元では上昇に転じている。「仕事と生活 (WLB)」も「雇用環境と賃金」同様に、谷型のグラフとなり、将来不安度はコロナ禍において減少したものの、上昇に転じている。

一方で、「健康状態」の将来不安度に大きな変動は見られず、コロナ禍を経たものの、その影響は小さいことが見受けられる。「社会とのつながり」の将来不安度でも大きな変動は見られず、コロナ禍により各地で外出自粛制限や通学・通勤の様態が大きく変化した、影響は小さいように見受けられる。

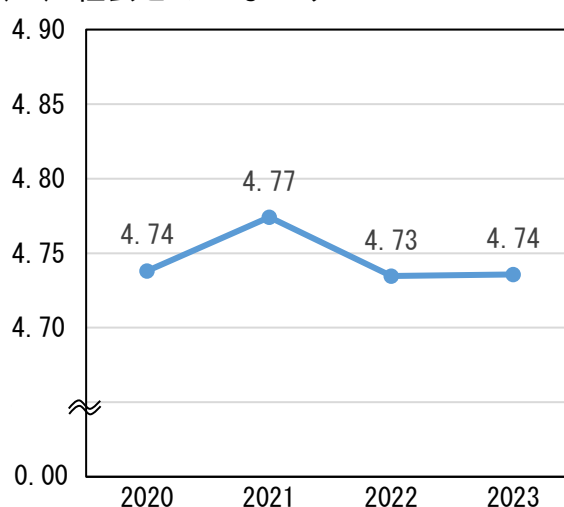
図表 1－3－3 分野別将来不安度の推移



(3) 健康状態



(4) 社会とのつながり



2. 分野別将来不安度（雇用環境と賃金・仕事と生活（WLB））

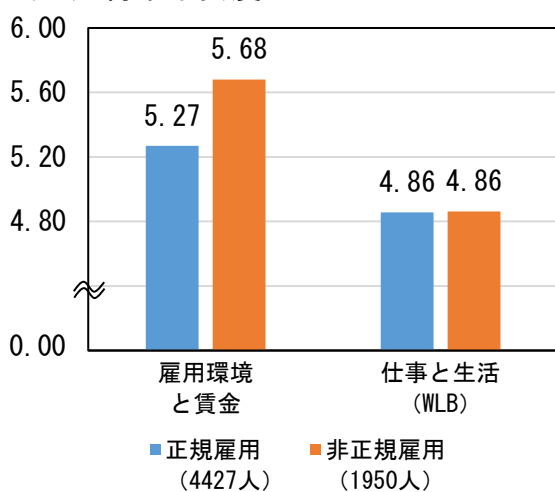
（正規・非正規雇用別の将来不安度）

将来不安度と満足度を雇用形態別に比較する。雇用環境と賃金の将来不安度において、非正規雇用者は正規雇用者と比べて将来不安度が高い。雇用形態別の満足度においても、非正規雇用者は正規雇用者と比べて満足度が低く、いずれも約 0.4 ポイントの差があり、雇用形態が「雇用環境と賃金」の将来不安度へ与える影響の大きさを示している。

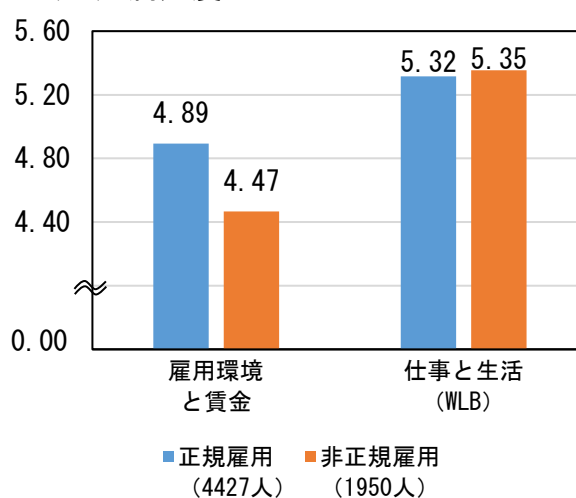
一方で、仕事と生活（WLB）では、正規雇用と非正規雇用の間で、将来不安度及び満足度に大きな差が見られなかった。雇用形態が、「仕事と生活（WLB）」の将来不安度へ大きな影響を与えないことが伺える。

図表 1－3－4 雇用形態別 将来不安度と満足度

(1) 将来不安度



(2) 満足度



（リカレント教育の受講状況）

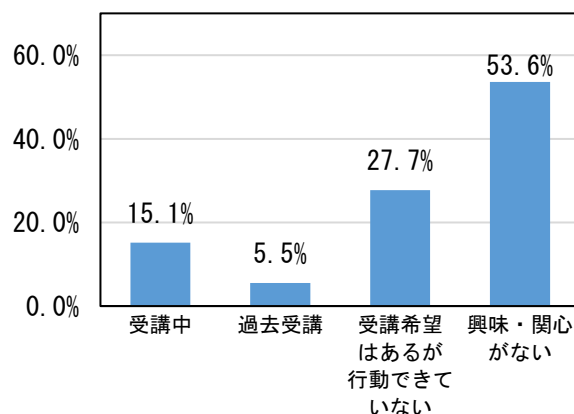
「人生 100 年時代」が謳われているなか、かねてよりリカレント教育の重要性が指摘されている。そこで、「雇用環境と賃金」及び「仕事と生活（WLB）」の将来不安度とリカレント教育への関心の関係に着目した分析を行う。

まず、リカレント教育の受講状況を確認²²すると、現在「受講中」は 15.1%、「過去受講」は 5.5%、「リカレント教育の受講希望はあるが行動出来ていない」人が 27.7%である。一方で、「リカレント教育に興味・関心がない」人が半数以上を占めている。

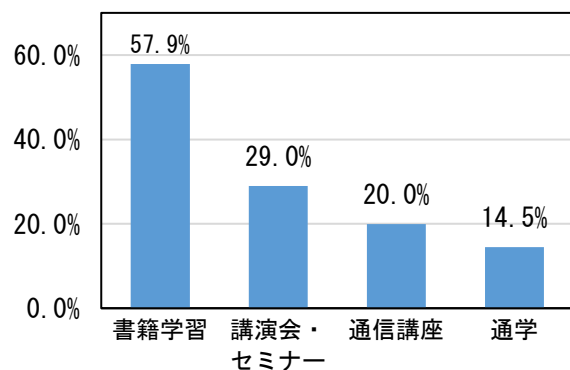
また、リカレント教育受講者の受講内訳として最も多いのは「書籍学習」であり、半数以上の人々が回答した。続いて、「講演会・セミナー」の講習を受けていると回答した人が、約 3 割いる。

図表 1－3－5 リカレント教育の受講状況

(1)リカレント教育の受講状況



(2)リカレント教育受講者の内訳(複数回答)



(備考) 正規雇用者・非正規雇用者を対象

（リカレント教育と将来不安度）

リカレント教育の受講状況ごとの分野別将来不安度については、正規・非正規雇用で違いがある可能性がある。その観点から、「雇用環境と賃金」の将来不安度について、「受講中」「過去受講」「受講希望があるが行動出来ていない」「興味・関心がない」と回答した人ごとに、正規雇用者と非正規雇用者の将来不安度を検証する。

「興味・関心がない」と回答した人を除き、いずれの区分においても、正規雇用者の将来不安度が非正規雇用者の将来不安度よりも大幅に低い。一方、「受講中」と回

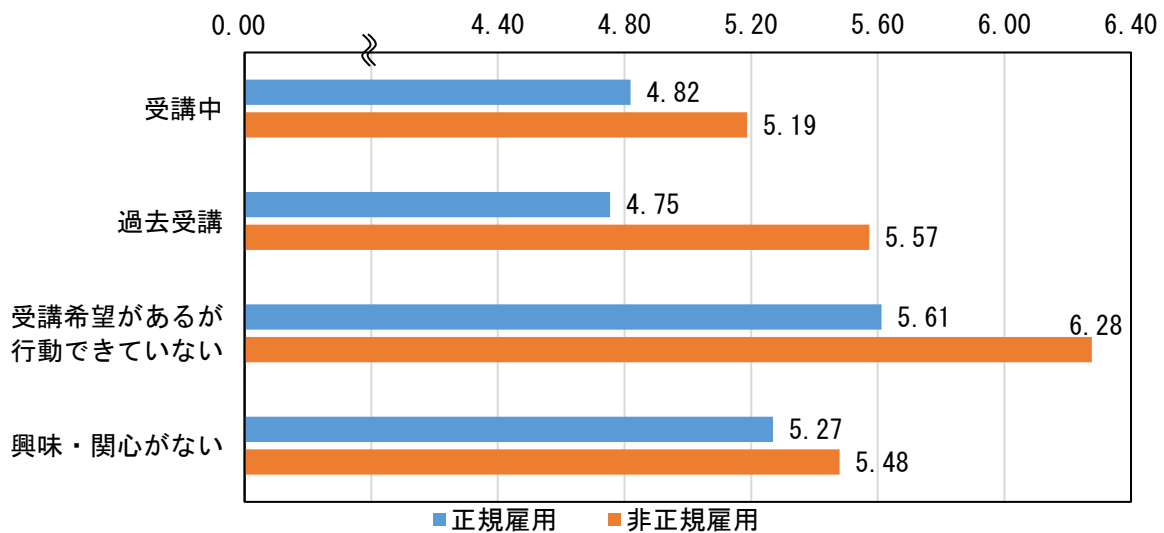
²² リカレント教育の実施状況に関する質問は、複数回答を可としており、「通学している（大学・大学院、専門学校、公共職業訓練所など）」「通信講座を受講している（通信制大学を含む）」「講演会・セミナーの講習を受けている（職場の勉強会等を含む）」「書籍での学習をしている」を「受講中」、「リカレント教育によって資格を取得した」「リカレント教育が仕事・就労の役に立った」を「過去受講」とした。なお、「リカレント教育の受講希望はあるが、行動できていない」と回答した人のうち、「受講中」「過去受講」へも回答した人がいるが、それぞれに重複計上している。

答した非正規雇用者は「受講希望があるが行動できていない」「興味・関心がない」と回答した正規雇用者よりも将来不安度が低い。

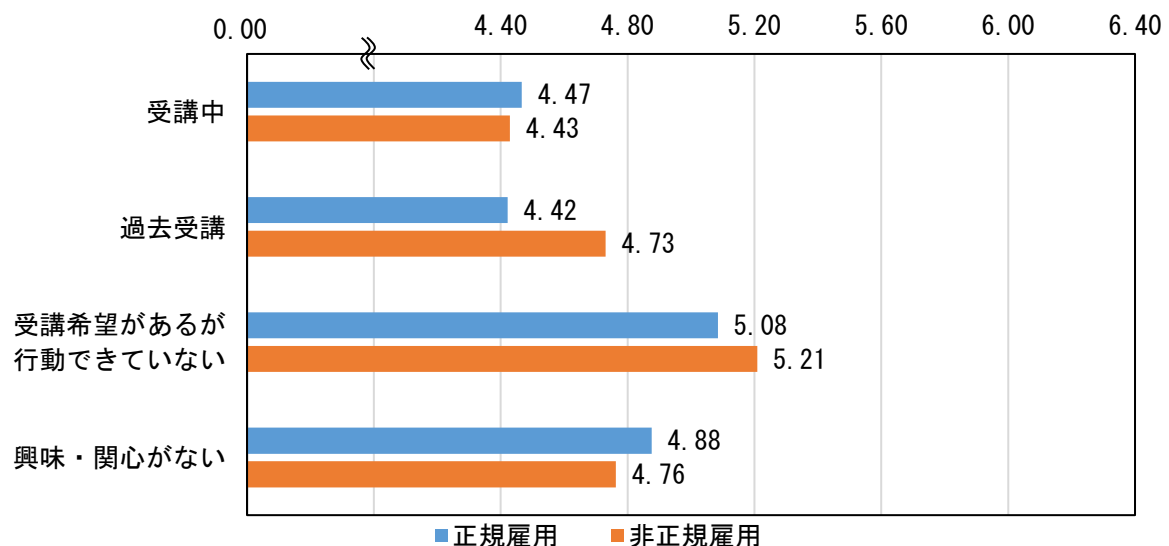
「仕事と生活（WLB）」の将来不安度を見ると、「過去受講」と回答した人を除いて、正規雇用者と非正規雇用者の将来不安度の差に大きな乖離は見られない。さらに、「受講中」「リカレント教育に興味・関心がない」と回答した人においては、正規雇用者より非正規雇用者の方が将来不安度は低い。

図表 1－3－6 リカレント教育受講状況別 分野別将来不安度

（１）雇用環境と賃金



（２）仕事と生活（WLB）

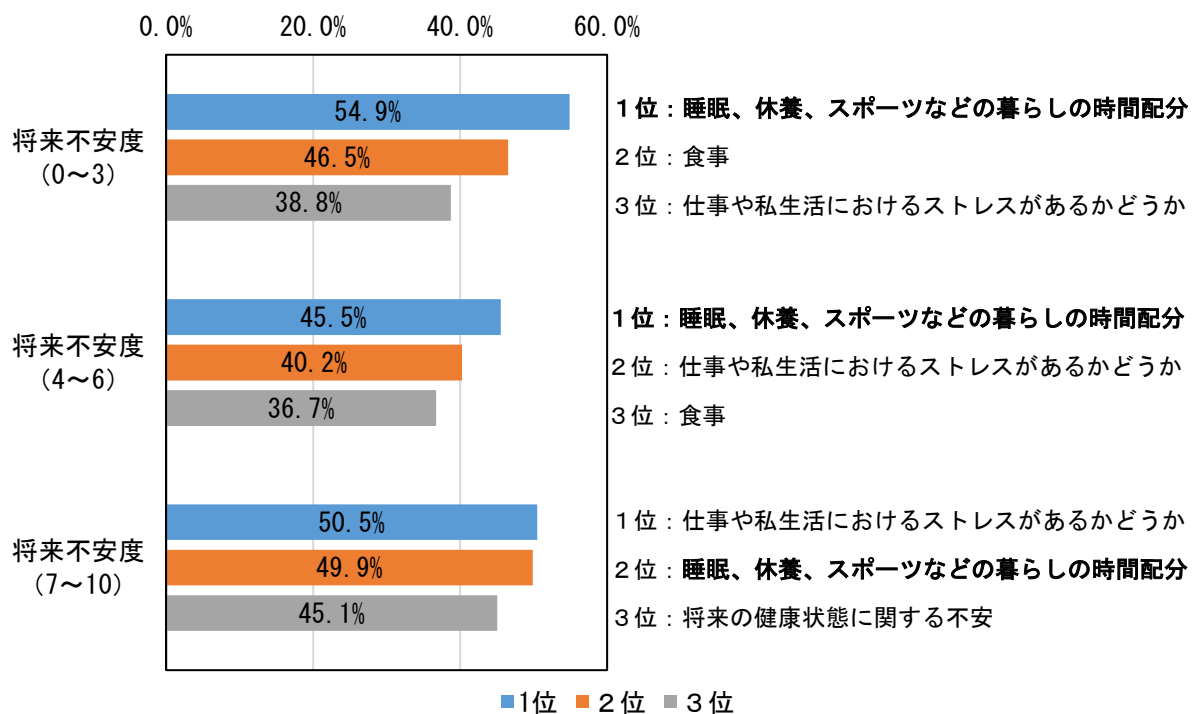


3. 分野別将来不安度（健康状態）

（健康状態の現在の満足度や不満に大きく影響する要因）

「体が資本」と言われるように、自身の健康状態は生活を維持するために不可欠であり、ひいては自身の健康状態が将来不安に大きく影響を与えると推察される。そこで、健康状態の現在の満足度や不満に、どのような要因が大きく影響するか、将来不安度の点数を0～3点、4～6点、7～10点と回答した人ごとに区分し、それぞれの回答割合を示した。いずれの区分においても、「睡眠、休養、スポーツなどの暮らしの時間配分」と回答した人の割合が高く、将来不安度が1～3点、4～6点と回答した人においては、最も回答割合が大きい。

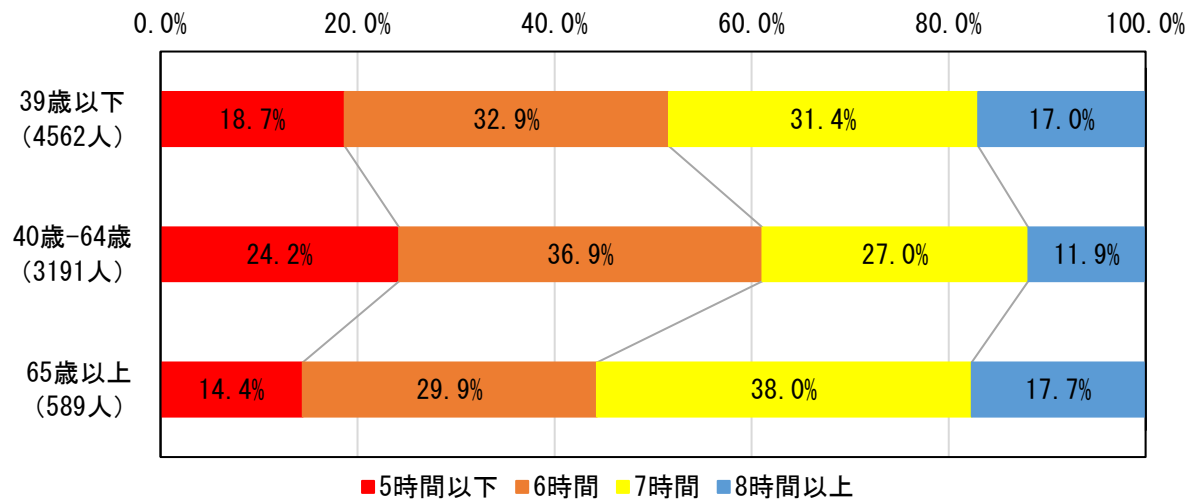
図表1－3－7 将来不安度別 健康状態の現在の満足度や不満に影響する要因（複数回答）



（平均睡眠時間の分布）

健康状態の現在の満足度や不安に影響する要因として比較的回答の多かった「暮らしの時間配分」のうち、睡眠に着目し、年齢階層別に平日の平均睡眠時間の分布を見る。各年齢階層間で比較したとき、平均「5時間以下」「6時間」睡眠の割合が最も高い階層はミドル層であり、平均「7時間」「8時間以上」睡眠の割合が最も高い階層は高齢層である。

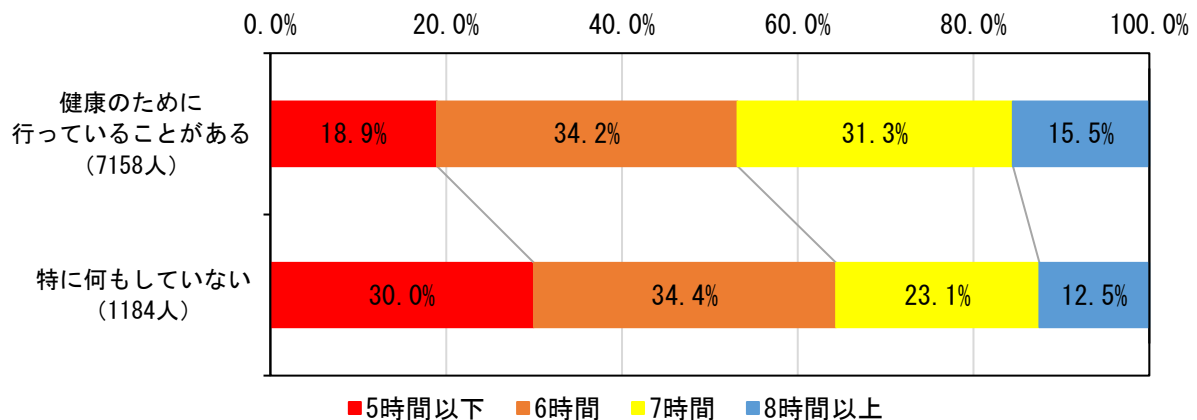
図表 1－3－8 平日の平均睡眠時間



（平日の平均睡眠時間と健康づくりの活動）

平日の平均睡眠時間と健康づくりの活動の関係を検証すると、「健康のために行っていることがある」と回答した人は、「特に何もしていない」と回答した人と比べて、「7時間」「8時間以上」の平均睡眠時間である割合が合計で1割以上高く、反対に「5時間以下」の平均睡眠時間である割合が、1割以上低い。

図表1－3－9 健康のために行っていることがある人と特に何もしていない人別
平日の平均睡眠時間の分布

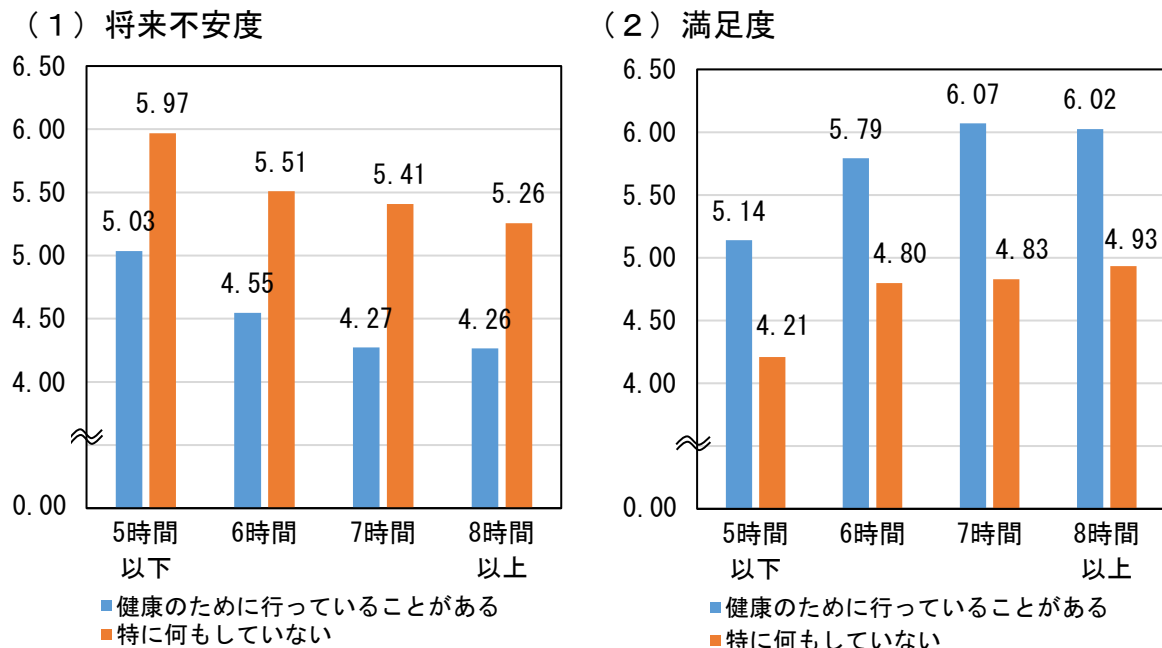


（健康のために行っていることがある人の将来不安度）

続いて、「健康のために行っていることがある」と回答した人と「特に何もしていない」と回答した人の健康状態の将来不安度を、平日の平均睡眠時間ごとに検証する。「健康のために行っていることがある」と回答した人は、「特に何もしていない」と回答した人と比べ、平日の平均睡眠時間の多寡に関わらず、「健康状態」の将来不安度が低い。また、「健康のために行っていることがある」と回答した人と「特に何

もしていない」と回答した人はそれぞれ、平日の平均睡眠時間が長いほど低くなっている。ただし、平日の平均睡眠時間が長くなるにつれ、「健康状態」の将来不安度は頭打ちの傾向が見られる。参考として、「健康状態」満足度を確認すると、将来不安度と同様の傾向が見られた。

図表1－3－10 平日の平均睡眠時間別 健康のために行っていることがある人と特に何もしていない人の「健康状態」の将来不安度及び満足度

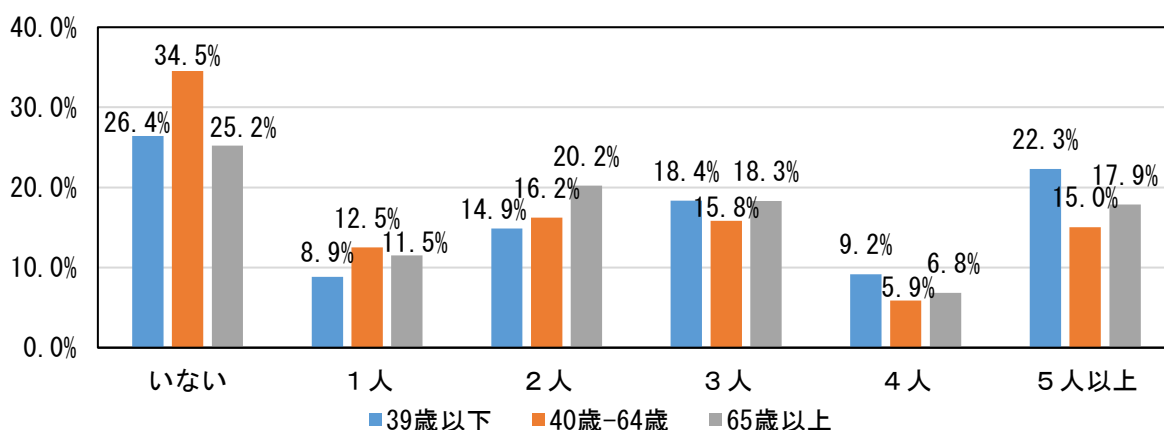


4. 分野別将来不安度（社会とのつながり）

（困ったときに頼りになる人の人数分布）

孤独は将来不安を助長すると考えられる。また、近年の急速な SNS の普及及び浸透により、他者とのつながりとは対面によるつながりのみならず、SNS 上のつながりをも意味していると言える。そのため、まず、その人が困ったときに頼りになる人（同居家族を除く）の人数分布を年齢階層別に確認する。若年層では頼りになる人が「5人以上」と回答した人が最も多く、ミドル層及び高齢層では頼りになる人が「2人」と回答した人が最も多い。

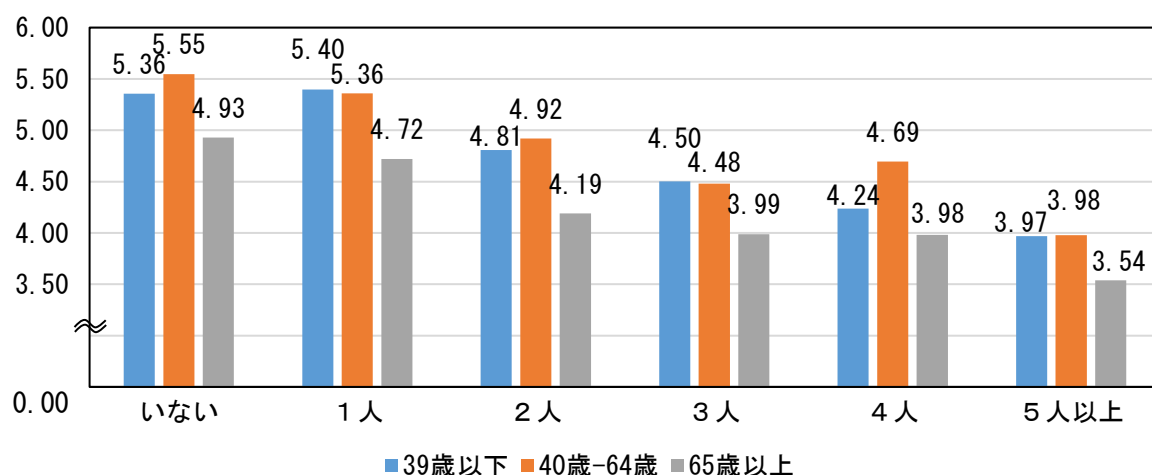
図表 1－3－11 困ったときに頼りになる人（同居家族を除く）の人数分布



（困ったときに頼りになる人の有無と将来不安度）

困ったときに頼りになる人（同居家族を除く）の人数と、「社会とのつながり」の将来不安度の関係を年齢階層別に検証する。全ての年代において「5人以上」と回答した人の将来不安度が最も低い。一方で、「いなし」「1人」と回答した人の「社会とのつながり」の将来不安度は、いずれの年代でも高くなっている。

図表 1－3－12 困ったときに頼りになる人（同居家族を除く）の人数分布別「社会とのつながり」の将来不安度

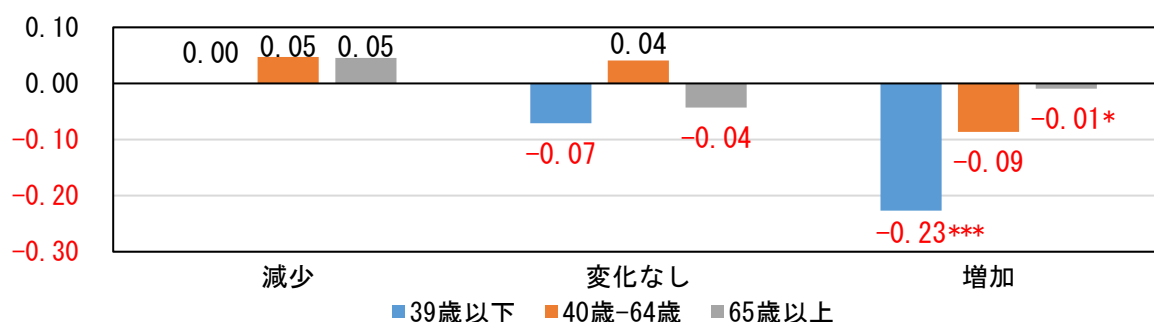


（困ったときに頼りになる人の人数の増減と将来不安度の増減）

継続サンプルを用いて前回調査と比較し、困ったときに頼りになる人（同居家族を除く）の増減と、「社会とのつながり」の将来不安度の増減との関係に年齢階層別で着目する。頼れる人が「増加」した人はいずれの年代も、「社会とのつながり」の将来不安度の平均ポイントが減少した。特に若年層では、-0.23 ポイントと大きく減少している。一方、頼れる人が「減少」した人のうち、ミドル層及び高齢層にお

いて「社会とのつながり」の将来不安度が上昇した。頼れる人数が「変化なし」であった人の「社会とのつながり」の将来不安度は、若年層及び高齢層において減少したが、ミドル層では上昇した。

図表1－3－13 困ったときに頼りになる人(同居家族を除く)の人数の増減別
「社会とのつながり」の将来不安度の変化幅【継続サンプル】

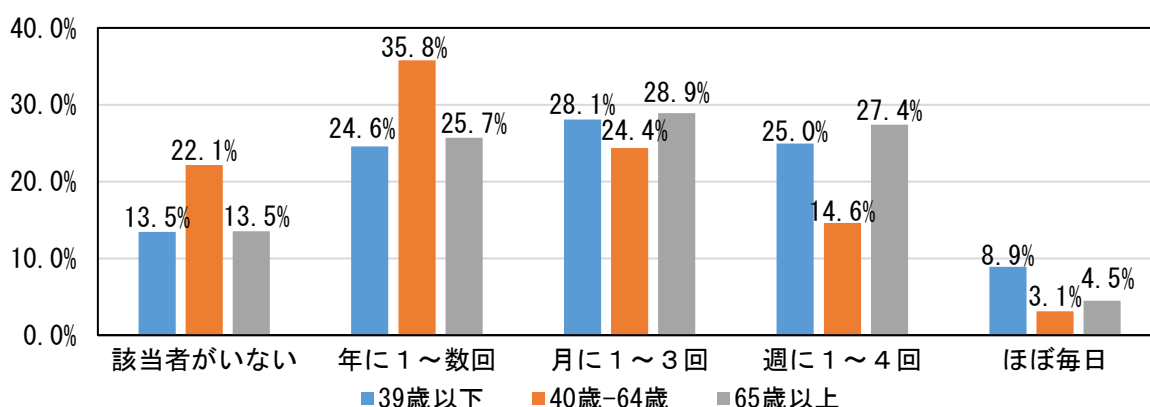


(備考) ***,*はそれぞれ1%、10%で有意

(友人との平均交流頻度)

続いて、友人との平均交流頻度に年齢階層別で着目する。交流する友人がいると回答した人の最も多い回答は、若年層及び高齢層が「月に1～3回」、ミドル層が「年に1～数回」である。高齢層では「週に1～4回」「月に1～3回」が同程度の回答割合であった。交流頻度が「ほぼ毎日」と回答した人は、いずれの年代も1割に満たなかった。該当者がいないと回答した人は、いずれの年代も1～2割程度いるが、最も回答割合が多いのはミドル層であった。

図表1－3－14 友人との平均交流頻度

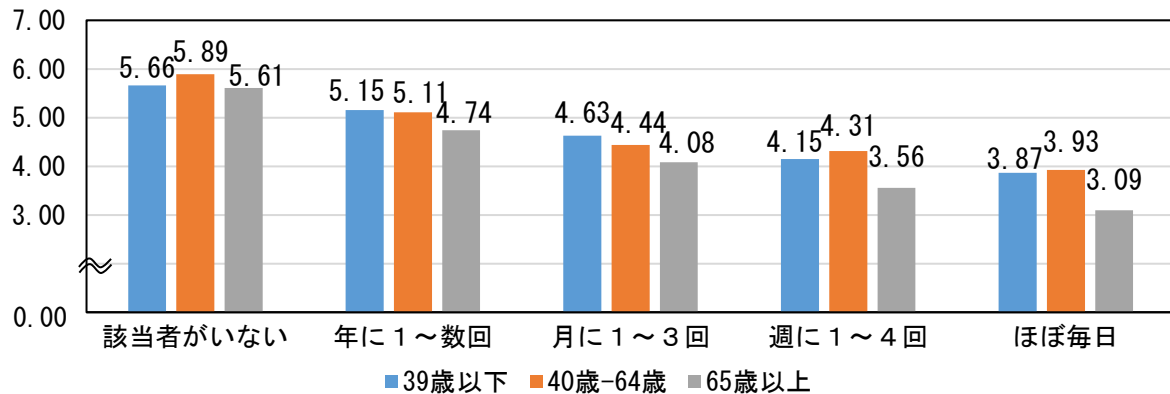


(友人との平均交流頻度と将来不安度)

友人との平均交流頻度と「社会とのつながり」の将来不安度の関係を年齢階層別に見ると、いずれの年代も友人との平均交流頻度が多いほど、将来不安度が低いこ

とが分かる。同一の交流頻度において年齢階層別で将来不安度を比較すると、高齢層は、若年層やミドル層よりも将来不安度が低い。一方、「該当者がいない」と回答した人の「社会とのつながり」の将来不安度は著しく高い。

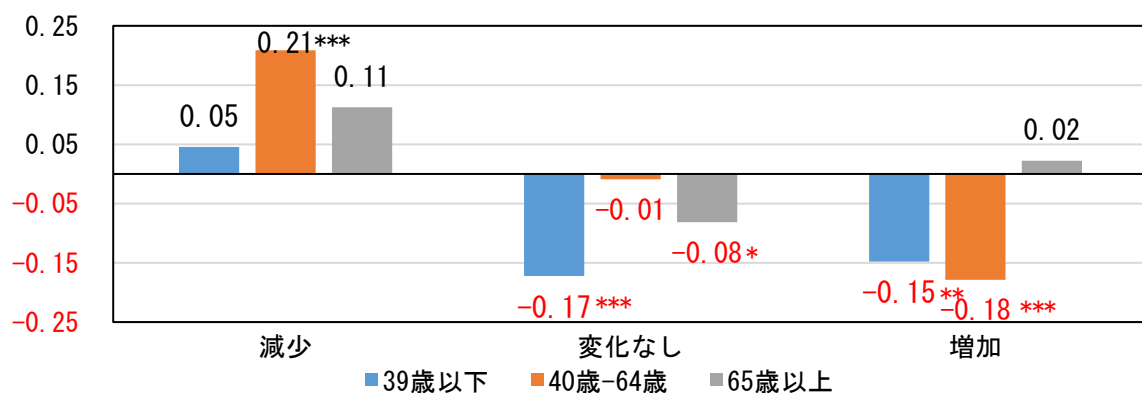
図表 1－3－15 友人の平均交流頻度別 「社会とのつながり」の将来不安度



（友人との交流頻度の増減と将来不安度の増減）

継続サンプルを用いて前回調査と比較し、友人との交流頻度の増減と、「社会とのつながり」の将来不安度の増減の関係を年齢階層別に検証する。友人との交流頻度が「増加」した人は、若年層及びミドル層において「社会とのつながり」の将来不安度が大きく減少した。一方、交流頻度が「減少」した人は、いずれの年代も将来不安度が上昇した。特にミドル層では、大きな上昇幅となった。友人との交流頻度が「変化なし」であった人は、いずれの年代も減少し、特に若年層において最も減少した。

図表1－3－16 友人との交流頻度の増減別 「社会とのつながり」の将来不安度の変化幅【継続サンプル】

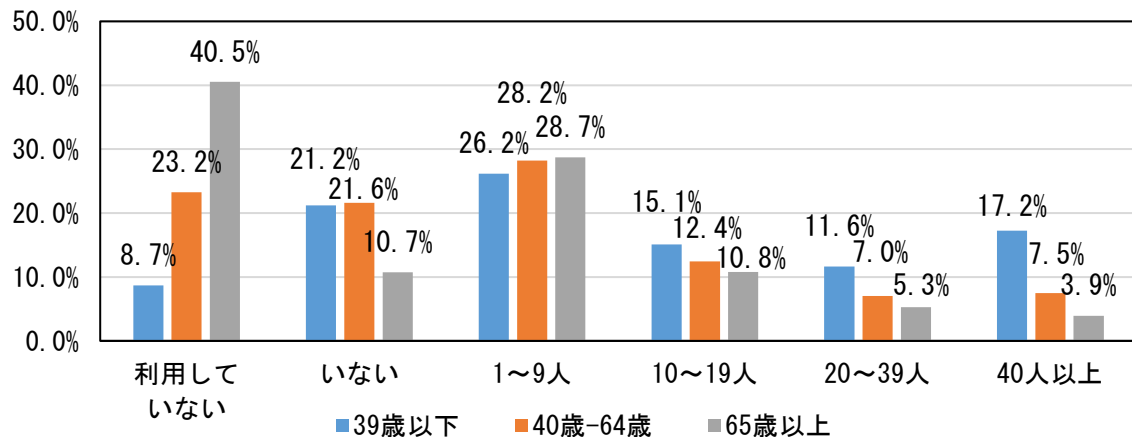


（備考）***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%で有意

（SNS 上の交流人数）

最後に、SNS 上の交流人数を年齢階層別に確認する。Facebook、Twitter、LINE などの SNS を利用している人においては、いずれの年代でも SNS 上の交流人数が「1～9 人」と回答している人が最も多い。また、SNS を「利用していない」と回答した人は、若年層では 1 割未満であるが、高齢層では 4 割を超えている。

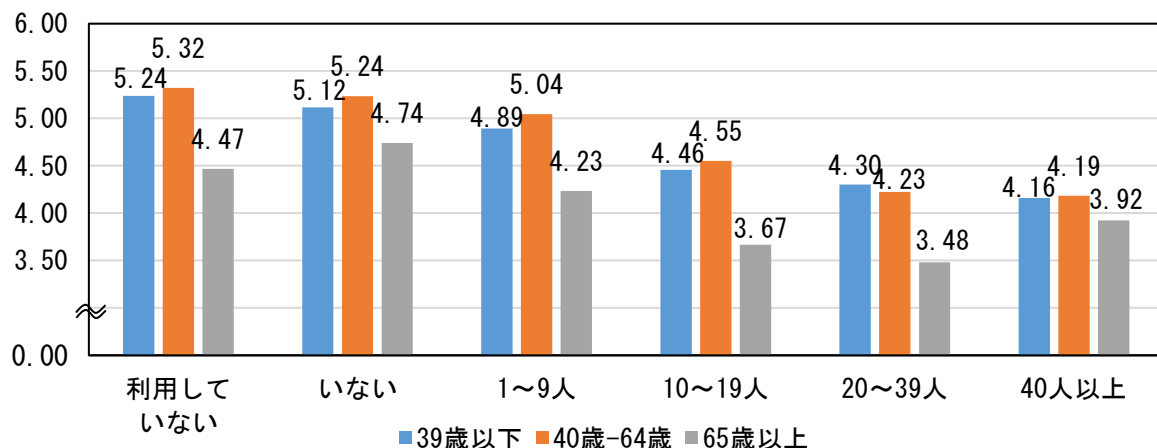
図表 1－3－17 SNS 上の交流人数



（SNS 上の交流人数と将来不安度）

SNS 上の交流人数と「社会とのつながり」の将来不安度の関係を年齢階層別に検証すると、若年層及びミドル層においては、SNS 上の交流人数が「40 人以上」と回答した人、高齢層においては、「20～39 人」と回答した人の将来不安度が最も低い。一方、SNS 上の交流者が「いない」、SNS を「利用していない」と回答した人の「社会とのつながり」の将来不安度は、SNS 上での交流者がいる人と比較すると、いずれの年代でも将来不安度が高くなっている。

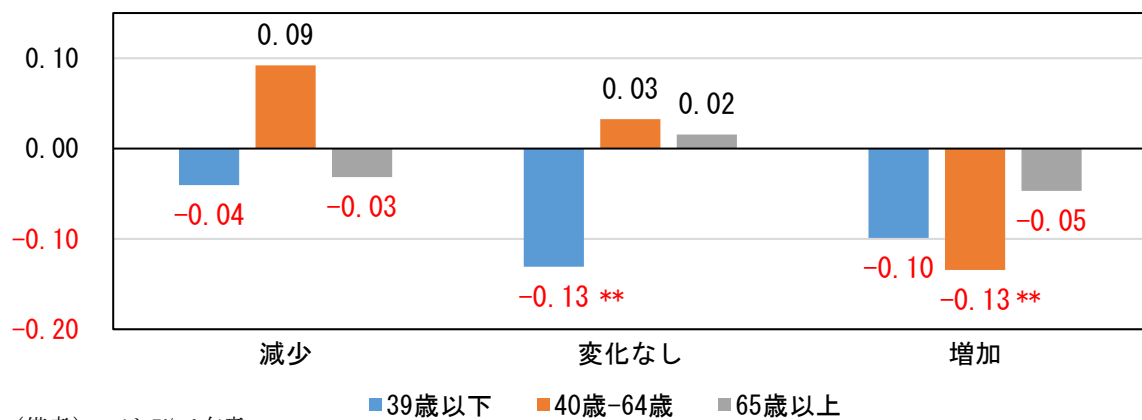
図表 1－3－18 SNS 上の交流人数別 「社会とのつながり」の将来不安度



（SNS 上の交流人数の増減と将来不安度の増減）

継続サンプルを用いて、年齢階層別に SNS 上の交流人数の増減と「社会とのつながり」の将来不安度の増減との関係を見ると、SNS 上の交流人数が「増加」した人は、いずれの年代も将来不安度の平均ポイントが減少した。利用頻度が「変化なし」であった人は、若年層において平均ポイントが減少している。また、利用頻度が「減少」した人はミドル層において平均ポイントが上昇したが、その他の年代では減少している。

図表1－3－19 SNS 上の交流人数の増減別「社会とのつながり」の将来不安度の変化幅【継続サンプル】



第4節 仕事への意識と満足度

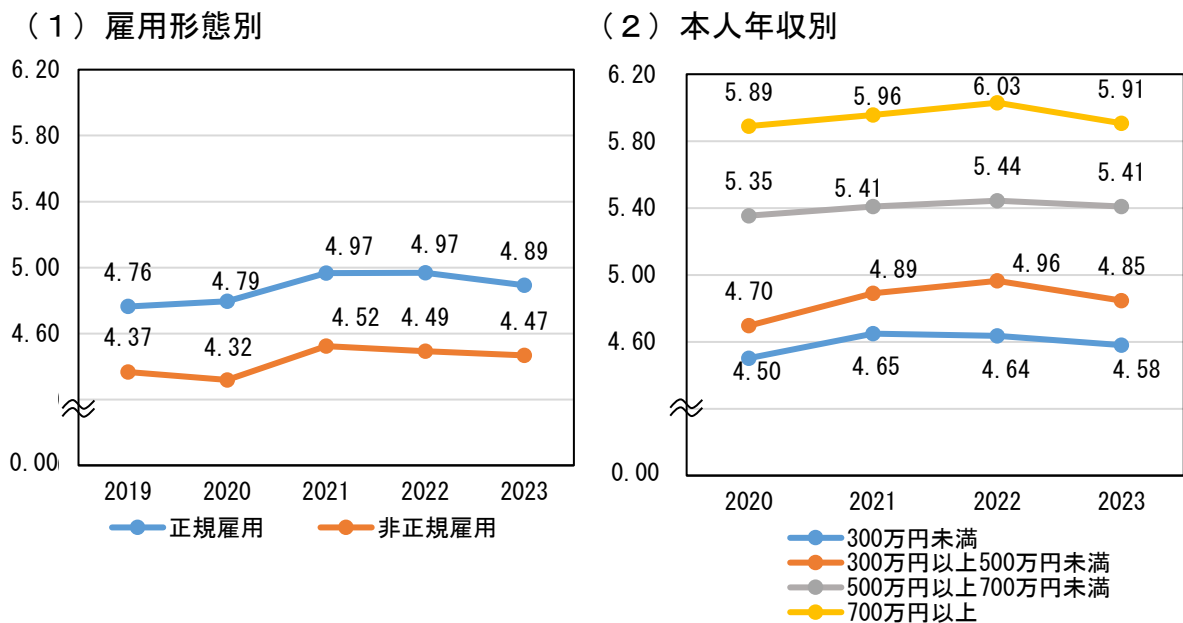
働き方改革やコロナ禍におけるテレワークの普及など日本の労働環境は近年変化しており、Well-beingの視点を経営戦略や人事施策に取り入れる企業が増えてきている。また、生活の中で多くの時間を占める仕事に対してどのように感じているかは、満足度に対して影響を与えていると推察される。こうした点も踏まえ、今回の調査では、仕事への感じ方（日々の仕事にやりがいを感じるか等）について質問している。本節では、このような仕事への意識が満足度へどのように影響しているかを中心に分析する。

1. 仕事への意識と「雇用環境と賃金」満足度の関係

（「雇用環境と賃金」満足度の動向）

まず、仕事への意識の影響を受けやすいと思われる、「雇用環境と賃金」満足度の動向について確認する。雇用形態別に見ると、正規雇用が非正規雇用よりも高くなっており、コロナ禍である2021年にやや上昇し、足元ではわずかに低下している。一方で、本人年収別に見ると、年収が高いほど満足度が高い傾向にあるが、経年での変動は大きくない。

図表1-4-1 「雇用環境と賃金」満足度の推移



（仕事への感じ方の現状）

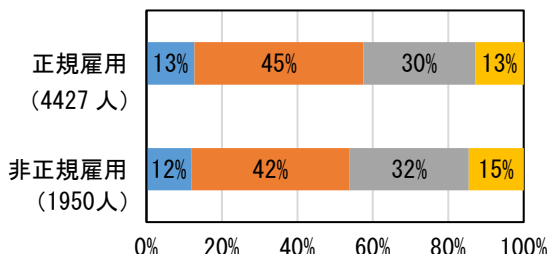
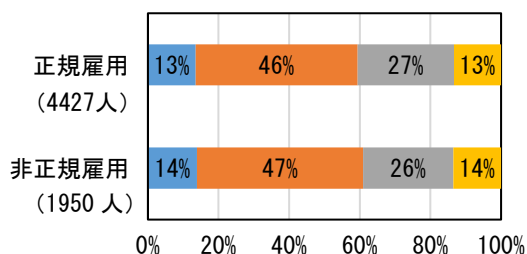
仕事への感じ方の現状を把握するため、仕事について「やりがいを感じる」「誇りに思う」「喜びや楽しみを感じる」「仕事や働き方を多くの選択肢から選べる」「人々の生活をより良くすることにつながっていると思う」のそれぞれにどの程度当てはまるかについて質問した。雇用形態別にその回答割合を見ると、いずれの場合にお

いても5割程度の人が仕事について前向きな意識を持っている。また、雇用形態での大きな違いはない。

図表1-4-2 仕事への意識の回答割合

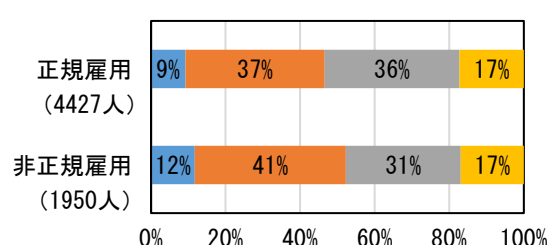
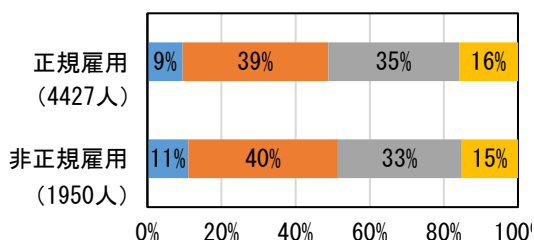
(1) やりがいを感じる

(2) 誇りに思う

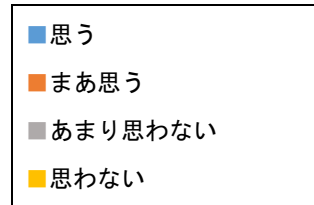
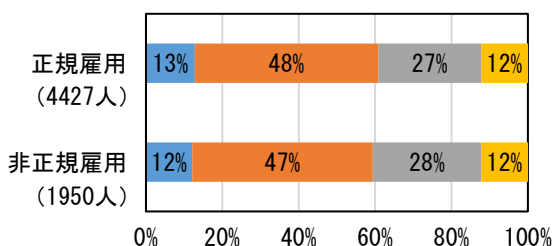


(3) 喜びや楽しみを感じる

(4) 仕事や働き方を多くの選択肢から選べる



(5) 人々の生活をより良くすることにつながっていると思う



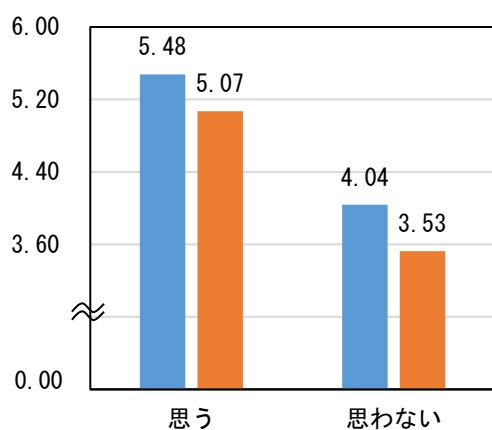
(雇用形態と仕事への意識)

次に、仕事への意識の違い²³と「雇用環境と賃金」満足度の関係を見ると、正規雇用、非正規雇用ともに仕事に対してプラスの感情を持つ場合に満足度が高くなっている。「やりがいを感じる」に注目すると、前述のとおり、非正規雇用は正規雇用よりも満足度が低い。やりがいを感じる非正規雇用はやりがいを感じない正規雇用よりも満足度が高くなっており、他の4つの仕事への意識についても同様の傾向が見られる。また、それぞれの仕事への意識の有無による満足度の違いを見ると、正規雇用、非正規雇用ともに、やりがいを感じる場合に最も差が大きくなっている。

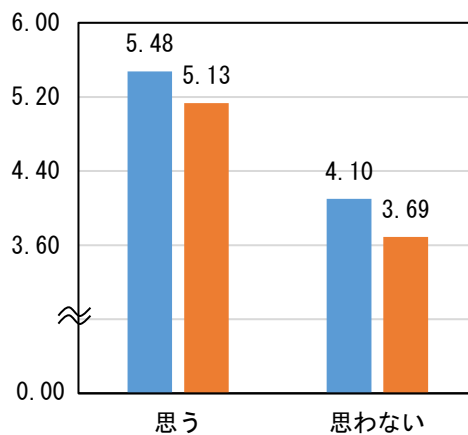
²³ 以下では、5つの仕事への感じ方について、「思う」「まあ思う」を選択した人を「思う」、「あまり思わない」「思わない」を選択した人を「思わない」としている。

図表 1-4-3 雇用形態別 仕事への意識と「雇用環境と賃金」満足度

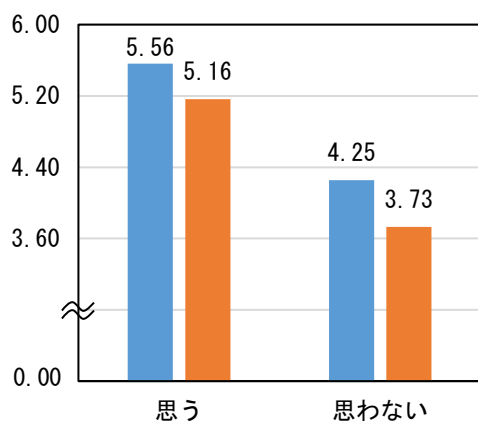
(1) やりがいを感じる



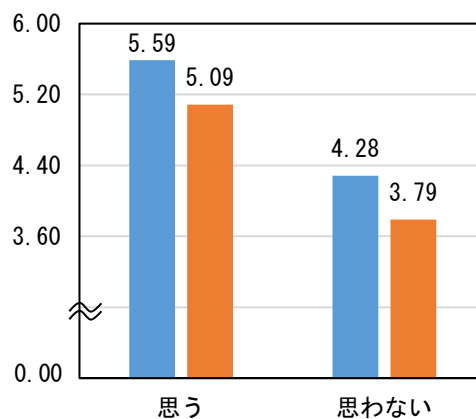
(2) 誇りに思う



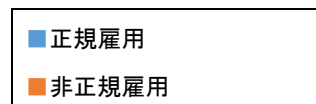
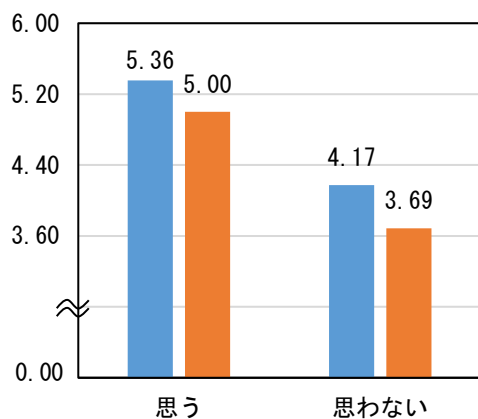
(3) 喜びや楽しみを感じる



(4) 仕事や働き方を多くの選択肢から選べる



(5) 人々の生活をより良くすることにつながっていると思う

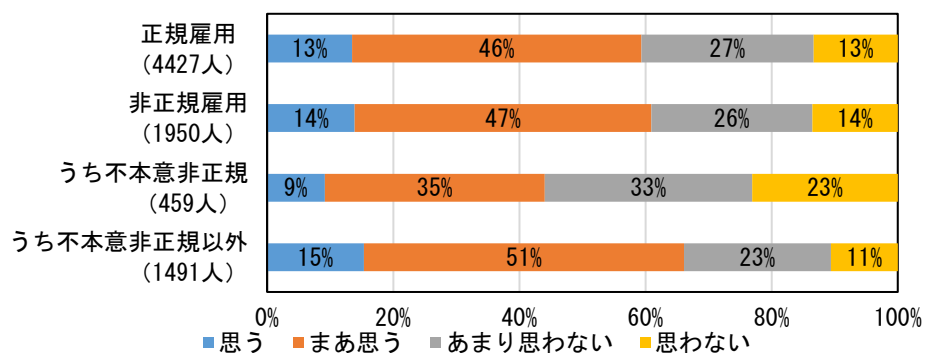


コラム 不本意非正規と仕事のやりがい

前述のとおり、正規雇用と非正規雇用の間で仕事への意識に大きな違いはない。一方で、本調査では、非正規雇用に従事している方に対して、就業理由を質問している。そのため、当該質問において、「正規の職員・従業員の仕事がないから」を選択した人を「不本意非正規」と定義することで、非正規雇用を細分化した上での分析が可能となる。本コラムでは、5つの仕事への意識のうち、「仕事のやりがい」に着目して、不本意非正規と不本意非正規以外²⁴の違いや特徴を紹介する。

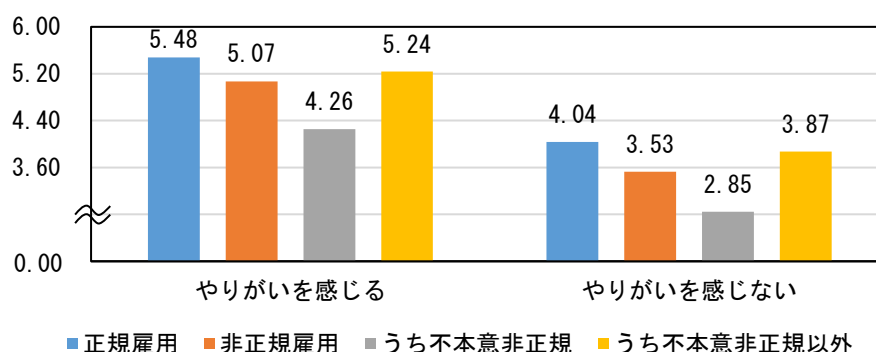
まず、「やりがいを感じる」への回答割合を見ると、不本意非正規でやりがいを感じる割合は44%なのに対し、不本意非正規以外では66%と大きな差がある。また、不本意非正規以外は正規雇用よりもやりがいを感じる割合が高い結果となった。

図表 1－4－4 仕事への意識（やりがいを感じる）の回答割合



次に、それぞれの「雇用環境と賃金」満足度を確認する。不本意非正規も仕事のやりがいがある場合に顕著に満足度が高くなる傾向に変わりはなく、不本意非正規であってもやりがいを感じる場合は、やりがいを感じない正規雇用よりも満足度が高くなっている。

図表 1－4－5 雇用形態別 仕事のやりがいと「雇用環境と賃金」満足度



²⁴ 「不本意非正規以外」には、例えば「自分の都合のいい時間に働きたいから」「家事・育児・介護等と両立したいから」などの理由により、非正規雇用に従事している方が含まれている。

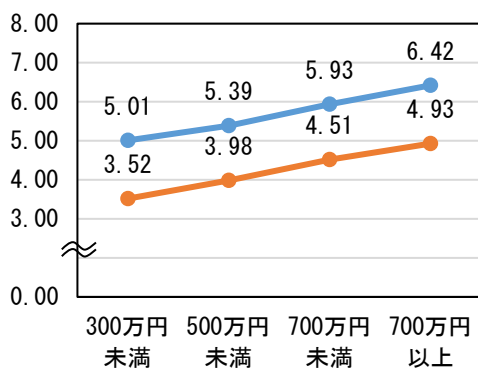
（本人年収と仕事への意識）

次に、本人年収別の仕事への意識と「雇用環境と賃金」満足度の関係を確認する。

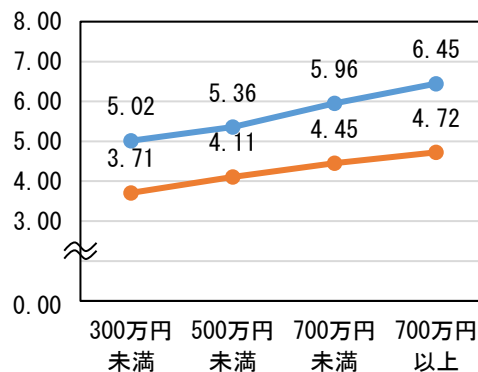
前述のとおり、仕事への意識に関わらず年収が高くなるほど満足度が上昇する傾向にあるとともに、仕事へプラスの意識を持つことで満足度が顕著に高くなっている。特に、「やりがいを感じる」と「誇りに思う」に着目すると、プラスの意識を持つ300万円未満の方がプラスの意識を持たない700万円以上よりも満足度が高くなっており、本人年収という客観的な要素に加えて仕事への主観的な意識が大きな影響を与えていることが伺える。

図表 1－4－6 本人年収別 仕事への意識及び「雇用環境と賃金」満足度

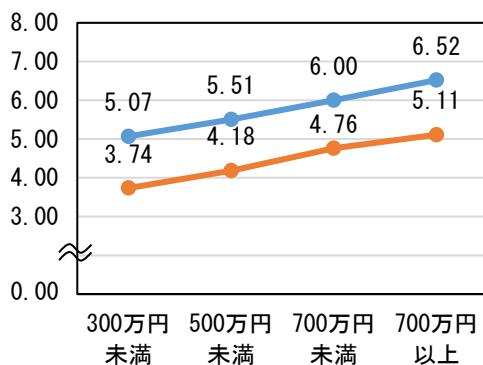
（１）やりがいを感じる



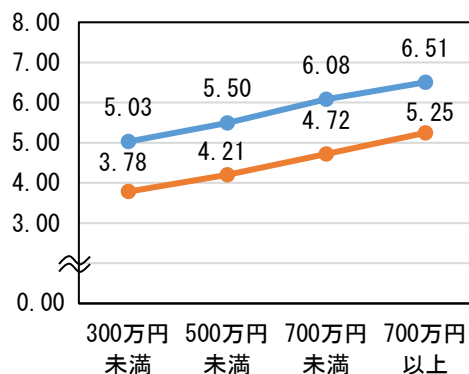
（２）誇りに思う



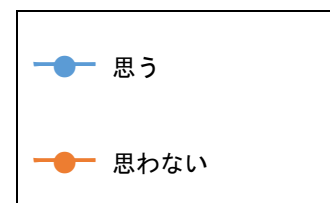
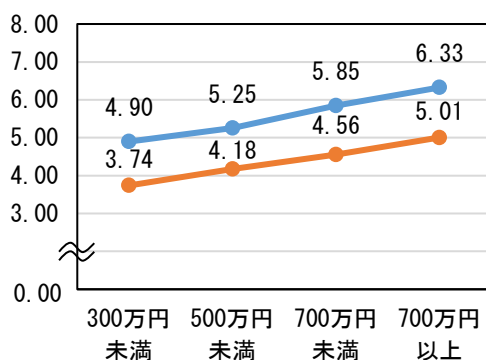
（３）喜びや楽しみを感じる



（４）仕事や働き方を多くの選択肢から選べる

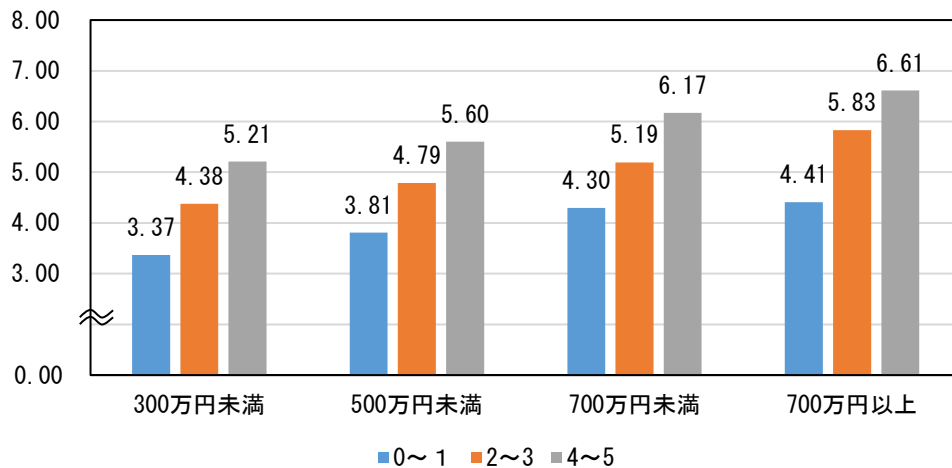


（５）人々の生活をより良くすることにつながっていると思う



ここまでは、それぞれの仕事への意識毎に検証したが、仕事へプラスの意識を持っている項目数に着目し、満足度の違いを確認する。本人年収別にみると、すべての区分において、項目数が増加するほど満足度が上昇する関係が見て取れる。

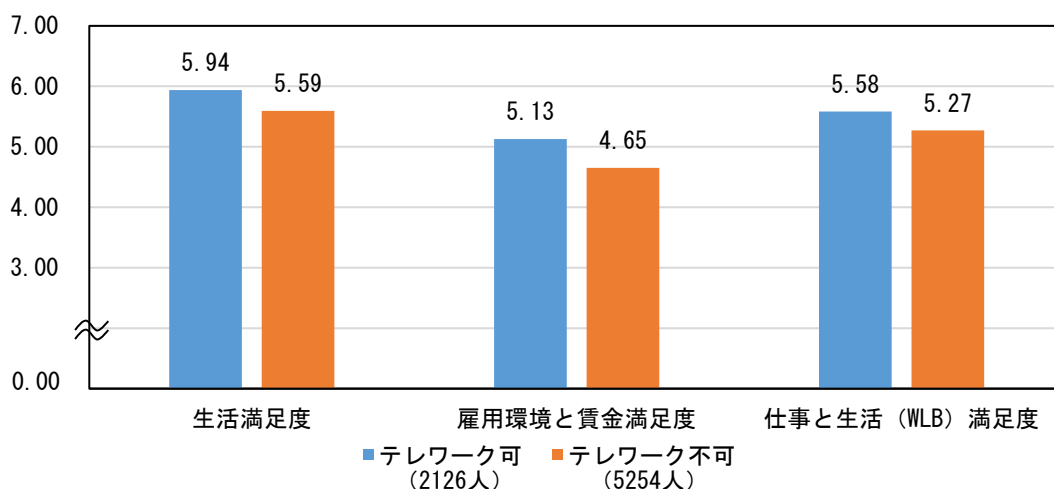
図表1－4－7 本人年収別 仕事へのプラス意識の項目数と「雇用環境と賃金」満足度



2. テレワーク及び仕事への意識と「仕事と生活（WLB）」満足度の関係 （テレワークと各種満足度）

次に、「雇用環境と賃金」満足度と同じく、仕事への意識の影響を受けるとされる「仕事と生活（WLB）」満足度を見ていく。前述のとおり、コロナ禍でテレワークが普及したが、こうした柔軟な働き方は仕事への意識と同様に「仕事と生活（WLB）」満足度へ影響を与えていると考えられる。そのため、まずは、テレワークの可否が各種満足度へどのような影響を与えているかを確認すると、生活満足度、「雇用環境と賃金」満足度、「仕事と生活（WLB）」満足度のいずれもテレワークができる場合の方が高くなっている。

図表1－4－8 テレワーク可否別各種満足度



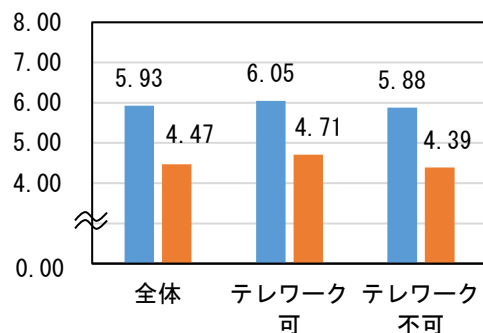
（テレワークと仕事への意識）

続いて、仕事への意識と「仕事と生活（WLB）」満足度の関係を確認すると、程度の違いはあるものの、テレワークの可否による違いよりも仕事へプラスの意識を持つことの方が、顕著な差が生じている。

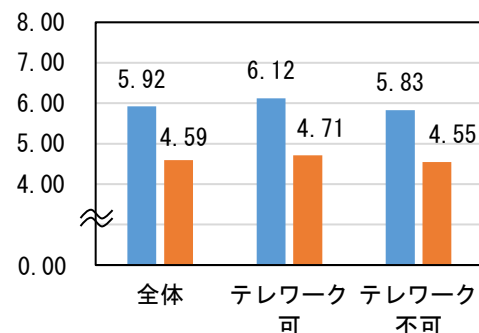
また、それぞれの仕事への意識ごとの満足度の変化をみると、「やりがいを感じる」場合が最も上昇幅が大きくなっている。加えて、テレワーク可否も考慮した上での満足度への影響については、テレワークが可の場合の「喜びや楽しみを感じる」が最も高い結果となっている。

図表１－４－９ 仕事への意識別 テレワーク可否と「仕事と生活（WLB）」満足度

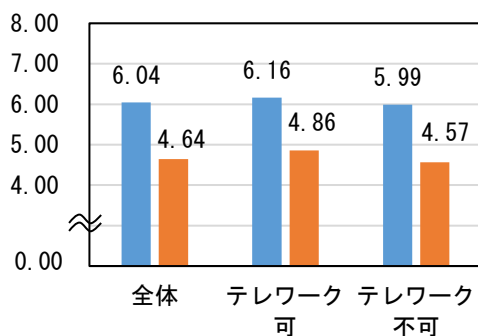
（１）やりがいを感じる



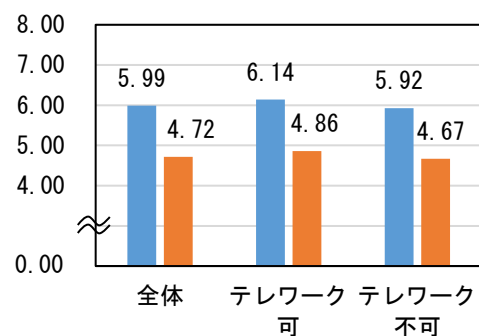
（２）誇りに思う



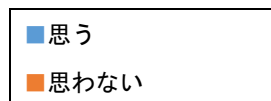
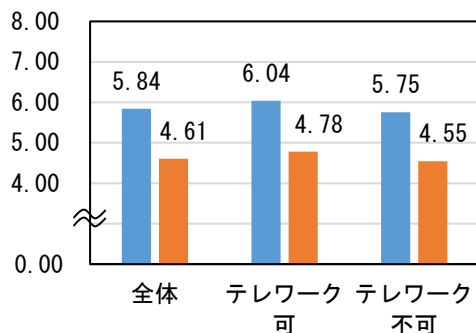
（３）喜びや楽しみを感じる



（４）仕事や働き方を多くの選択肢から選べる



（５）人々の生活をより良くすることにつながっていると思う



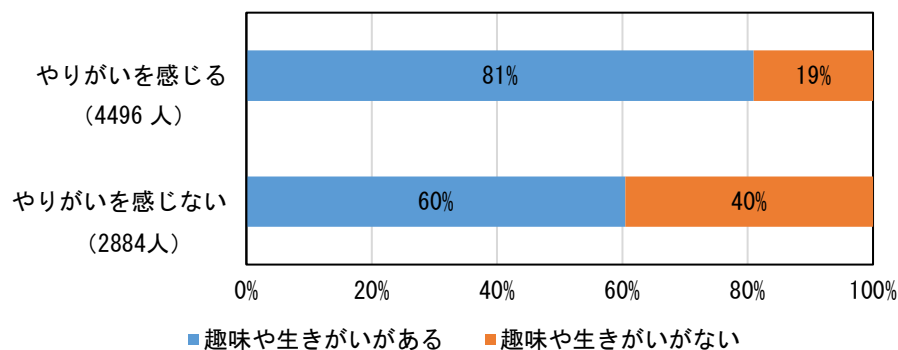
3. 仕事のやりがい・生きがいの有無と満足度の関係

（仕事のやりがいの有無と生きがいの有無の関係）

ここまで仕事への意識が満足度へ与える影響を見てきたが、「やりがいがある」場合の押上げ効果が高い傾向にあった。また、これまでの報告書²⁵において、趣味・生きがいの有無が満足度に大きな影響をもたらすことが分かっている。これらを踏まえ、仕事のやりがいの有無と趣味・生きがいの有無で場合分けを行い、それぞれの各種満足度を分析する。

まず、仕事のやりがいの有無ごとに趣味や生きがいの有無の割合について見ると、やりがいを感じる人のうち約8割が趣味や生きがいがあると回答しているのに対し、やりがいを感じない人は約6割程度と相対的に少なくなっている。

図表1－4－10 仕事のやりがいと趣味や生きがいの有無



（仕事のやりがい・趣味や生きがいと満足度）

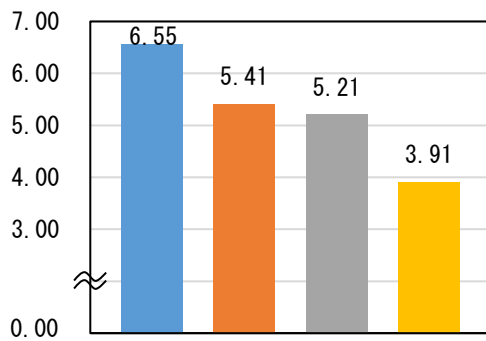
上記の場合分けについて、仕事のやりがいの有無が影響を与えることが確認された「雇用環境と賃金」満足度と「仕事と生活（WLB）」満足度に加え、趣味や生きがいの影響を受ける生活満足度、「生活の楽しさ・面白さ」満足度の4つを確認する。いずれの満足度においても、やりがい・生きがいの両方がある場合が最も高く、両方ない場合に最も低いという結果となった。特に、生活満足度において、その差が大きくなっている。

一方、やりがいのみ又は生きがいのみがある場合は、満足度によって傾向が異なっている。「生活の楽しさ・面白さ」満足度は、やりがいのみより生きがいのみある方が高くなっているが、それ以外の満足度においては、反対にやりがいのみの方が低くなっている。

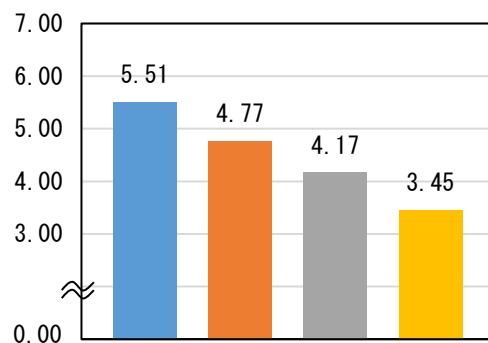
²⁵ 内閣府（2020）『「満足度・生活の質に関する調査」に関する第3次報告書』において、趣味や生きがいがないとする人は、あるとする人と比べて、生活満足度、「生活の楽しさ・面白さ」満足度がともに低いことが示されている。

図表 1－4－11 仕事のやりがいと趣味や生きがいの分野別満足度

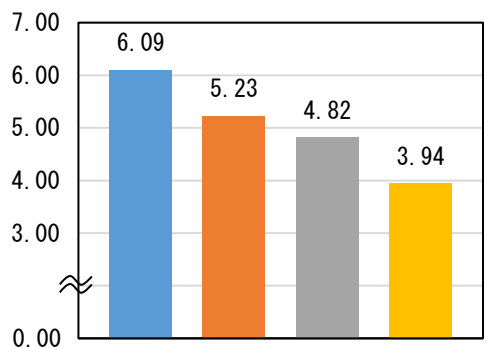
(1) 生活満足度



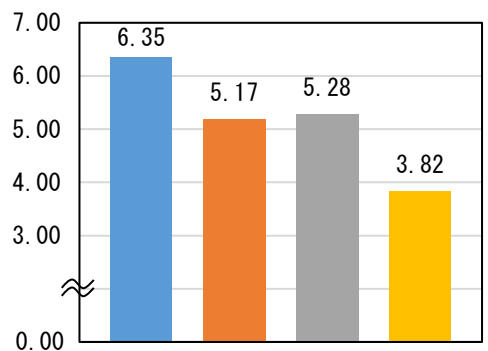
(2) 「雇用環境と賃金」満足度



(3) 「仕事と生活 (WLB)」満足度



(4) 「生活の楽しさ・面白さ」満足度



■ 仕事にやりがいを感じ、趣味や生きがいがある (3640 人)
■ 仕事にやりがいを感じるが、趣味や生きがいはない (856 人)
■ 仕事にやりがいを感じないが、趣味や生きがいはある (1774 人)
■ 仕事にやりがいを感じず、趣味や生きがいもない (1140 人)